石巻市

文化財だより

第24号

もくじ

石巻市指定文化財

吉祥寺・龍泉院イチョウ治療事業報告 …… 1

平成6年度文化財めぐり …… 7

文化財標柱・説明板設置事業 …… 8

旧町名表示石柱設置事業 …… 9

第41回文化財防火デー …… 9

平成6年度石巻市文化財パトロール事業報告 …… 10

石巻市内所在指定文化財一覧 …… 11

諸職関係民俗文化財調査報告(2)

4．桶屋 …… 1

5．味噌・醤油醸造 …… 6

6．網師 …… 15

石巻市教育委員会

石巻市指定文化財
吉祥寺・龍泉院イチョウ治療事業報告

平成六年の夏は例年になく暑く、雨の少ないカラカラ天気が続きました。

この猛暑のさなか、石巻市指定文化財である吉祥寺と龍泉院のイチョウに、枝が抜け落ちたり、樹皮が剥がれる等の被害が生じました。石巻市教育委員会では、これらの貴重な文化財の治療及び保存対策を進めるため、仙台市在住の樹医（樹木の医者）三嶋久志氏に診断を依頼しました。その結果は、次ページ以降に掲載した樹木診断カルテにあるとおりです。

イチョウの治療事業は、三嶋氏のカルテをもとにして、平成六年一〇月から一一月にかけて実施することとなりました。幸い、三嶋氏の指導・助言を得ながら作業を進めることができ、一一月下旬に無事治療事業は終了しました。

以下に、各イチョウの治療に至る経過を簡単に報告します。

一、吉祥寺のイチョウ

市内高木字寺前の吉祥寺の山門前に、二本の大きなイチョウが立っています。

平成六年八月八日の早朝、山門に向かって右側のイチョウの枝（直径約九〇㌢、長さ約一五㍍）が、付け根部分から抜け落ちてしまいました。落ちた枝は道路をふさいでいたため、吉祥寺の檀家のかたがたにお願いして、除去していただきました。

▶吉祥寺のイチョウ

八月十四日に、樹医の三嶋久志氏に診断していただき、次のような所見を得ました。

①木の太さに対して葉の数が少なく、葉の大きさも通常の五分の三程度で、木の状態は良くない。

②駐車場にしている部分のうち、イチョウ周辺の砂利を除去し、施肥を行って車の進入を禁止する。

③枝が抜け落ちた部分（枝抜痕）は、腐食の進行を防止するため防菌防腐剤を塗布し、発泡ウレタン等を塗って成形塗装する。

④北側（本堂・庫裏方向）に伸びた枝（幹の付け根での周囲約五㍍、長さ約二五㍍、地上高約八㍍）は、自重で折損し建物等に被害を及ぼす危険を防止するため、支柱を設置する。

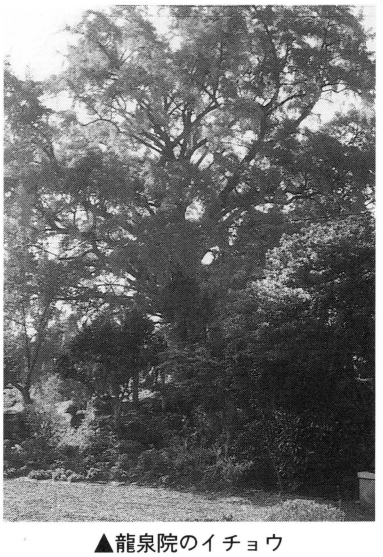
この所見に基づいて、枝抜痕と幹周囲の腐朽部分の切削・殺菌消毒、枝抜痕への発泡ウレタン充填、根元周辺の砂利除去と土壌改良、立入り防護柵の設置等の治療を施しました。

治療を行うかたわら、北側に伸びた枝の折損防止用支脚を設置しました。この支脚は、枝の大重量を支える必要があることから、コンクリートで基礎を築き、鋼管四本を使用した鉄塔状の頑丈なものとしています。

こうした作業を行ううちに、八月八日に抜け落ちた枝の直上の枝も、折損する可能性があることがわかりました。これは、今まである程度重量を支えていた下の枝が抜け落ちて支えがなくなったこと、大きな枝抜痕ができたために上の枝の付け根が枝の重量に耐えられなくなる恐れが出たこと、等によるものです。そこで、止むを得ずこの枝を中ほどから伐採し、重量を軽減する処置を取りました。

二、龍泉院のイチョウ

市内の水沼字天似にある龍泉院の山門をくぐってすぐ左側に、大きなイチョウの木が一本立っています。



▲龍泉院のイチョウ

吉祥寺のイチョウが枝抜けしたのと同じ八月八日、龍泉院からイチョウの樹皮が腐ってはがれている、との連絡が石巻市教育委員会にありました。

このイチョウも、三嶋久志氏に診断していただいたところ、

①粗皮（一番外側の樹皮）に腐食が見られるが、木の勢いは良い。

②腐食した粗皮を全てはがし、特殊な泥を塗ってムシロで巻く。

③根元の周囲に施肥を行う。

という所見を得ました。

これに基づいて、はがれている樹皮の除去と殺菌消毒、はがしたあとの化土（泥炭土）による被覆、土壌改良等の治療を実施しました。龍泉院のイチョウについては、木そのものの勢いが良いので、あまり心配する必要はない、という三嶋久志氏の見解でした。

※本事業の実施にあたってご協力をいただきました吉祥寺・龍泉院、三嶋久志氏及び関係者の皆様に、厚くお礼申し上げます。

樹木診断カルテ

No. 67　　樹木医名　三嶋久志

診断年月日	平成 6 年 8 月 14 日(日)			天候	晴れ
対象樹木	イチョウ(♀)	名称	吉祥寺のイチョウ	樹齢	350年(推定)
天然記念物	国. 県. 市町村	指定	M.T.S.H 年 月 日		
保存樹木	号	指定	M.T.S.H 年 月 日		
その他	石巻市文化財 昭和55年12月10日 指定				
所在地	石巻市高木字寺前5番地				
所有者	氏名	一方井 文章	住所	同上	

○ 形態的特徴

樹高	22.5m	胸高周囲	620cm	枝張	E 12m W 15m S 10m N 22m	枝下高	600cm
単幹 双幹	本立	根元周囲	760cm	根張	E 0.3m W 1.0m S 1.1m N −	埋根	

○ 活力指標

項目	摘要	評点
樹勢	全体に生気がない。	3.0
樹形	地上6mから枝が激しく分岐、逆三角形(杯状)を呈す。	2.5
枝条・梢端の枯れ	8月8日に東側最下枝が付け根から枝抜け。以前梢端部剪定。	2.0
枝葉の密度	天空が透けて見える程度で疎である。	3.0
新梢の伸長量	下枝で15cm程度。	2.5
葉色・形状	淡緑色。形状は通常の3/4程度。	3.0
樹皮の色・形状	亀裂の凹凸が一部でなくなり平滑となっている。	3.0
落葉状況	北側の最下枝で最長枝の部分が他より早く黄葉。	2.5
萠芽枝	幹の凹部からわずかに発生。	2.5
根系の状況	根腐れは生じていないが、砕石と踏圧により発達が抑制されている。	3.0

評点計　27点／項目数 10＝活力度2.7点　　評点：1＝正常　～4＝衰退顕著

○ 損傷及び腐朽の有無

部位	幹	原因	枝抜け	程度	130cm×70cm×深さ50cm
手当の経過	このほかに腐朽部の凹部(15cm×10cm×5cm)が15箇所ほどある。				

○ 生物的要因(過去の被害歴含む)

項目	種類	部位	程度
病害 虫害 鳥獣害 菌害 その他	材質腐朽菌(サルノコシカケ菌)	幹の地上20cm	1か所 幅20cm×厚さ5cm

○ 環境的要因

周囲(半径50ｍ)の土地改変、構造物の有無	西側にコンクリート階段、南側にコンクリート擁壁、北東は砕石駐車場
周囲(半径20ｍ)の植生	マサキ、キャラボク、カヤ、ヒイラギ、ジャノヒゲ、マダケ、草本は除草剤で枯殺。

○ 土壌の状態

土壌深	土色	腐植	土性	硬度	構造	石礫	水湿	根系	PH
砕石10cm	褐色	乏し	埴質壌土	固結	堅果状	頻る富む	乾	少	

○ 管理状況

整枝・剪定	施肥	消毒	工作物
以前に梢端部剪定	－	－	－

○ 総合所見

山門の両側に二本の雌のイチョウがたっており、当該木は右側に立つ350年以上（推定）の老木で、地上６ｍ付近から太枝が激しく分岐し、杯状を呈しており、今回（８月８日）に東側の最下枝（直径90cm、長さ15ｍ）が幹から枝抜けを起こしたものである。抜け痕をみると周囲15～30cmを残し、中央部はほとんど腐朽していたため、加重に耐え切れなかったものと思われる。

この抜け痕をそのまま放置すると、雨水の浸透により腐朽がさらに進行するので、切削、消毒、填充などの外科的処理をしなければならない。

また、この老木は樹冠下に砕石が厚さ10cmほど敷かれ、駐車場に利用され踏圧にさらされるなど、成育環境は極めて悪化し、さらに除草剤の施用により樹勢が衰退化している。早急に樹勢回復処置を講じる必要がある。

北側の最下枝が長さ22ｍもあるので加重が大きく、折損の危険性も考えられるので、支柱の設置も考慮する。

○ 対　策

① 枝抜け痕の処置

腐朽部を切削し、高圧洗浄機（ジェットウォーター）で洗浄して充分乾燥した後、防菌防腐剤のトップジンＭペーストを塗布する。次に発泡ウレタンで填充整形し、表面をパテなどの硬化剤で処理する。最後にペンキで色彩を整える。

② 幹の周囲に点在する凹部（腐朽部分）の処置

これも上記と同様填充処理を行なう。

③ 土壌改良と施肥

樹冠下が砕石の敷き砂利で固められ、根系の発達が著しく抑制されている。この敷き砂利（厚さ10cm）を根系を損傷しないように、根元から６～７ｍの範囲を注意して除去し、そのあとに腐葉土やバーク堆肥などに油粕を加えた有機物で厚さ７～10cmにマルチングする。

さらに緩効性の肥料（グリーンパイル）を㎡あたり0.5本打ち込んでおく。

④ 支柱の設置

北側の最下枝が二股に分かれる部分（凡そ地上14～15ｍ）を二脚の鉄柱か、鳥居型の鉄柱で補強する。

⑤ 立ち入り防護さくの設置

土壌改良した部分と駐車場にする部分の境に丸太柵を設置する。

樹木診断カルテ

No. 68　　樹木医名　三嶋久志

診断年月日	平成 6 年 8 月 14 日(日)			天候	晴れ
対象樹木	イチョウ(♀)	名称	龍泉院のイチョウ	樹齢	凡そ300年
天然記念物	国. 県. 市町村	指定	M.T.S.H 年 月 日		
保存樹木	号	指定	M.T.S.H 年 月 日		
その他	石巻市文化財 昭和55年12月10日 指定				
所在地	石巻市水沼字天似25番地				
所有者	氏名	泉 孝夫	住所	同上	

○ 形態的特徴

樹高	25m	胸高周囲	500cm	枝張	E 10m W 13m S 13m N 13.4m	枝下高	700cm
単幹 双幹 本立		根元周囲	630cm	根張	E W S N	埋根	

○ 活力指標

項目	摘要	評点
樹勢	やや正常	2.0
樹形	正常	1.5
枝条・梢端の枯れ	少ない。	2.0
枝葉の密度	正常よりやや疎。	2.0
新梢の伸長量	20～30cm	2.0
葉色・形状	正常	1.5
樹皮の色・形状	内樹皮部分が地上から2.5m位まで幹周の1/3ほど腐朽している。	3.0
落葉状況	正常	2.0
着果量	毎年少ない性質。	2.0
根系の状況	内樹皮の腐朽部分から発根している。	3.0

評点計　21点／項目数 10＝活力度2.1点　　評点：1＝正常　～4＝衰退顕著

○ 損傷及び腐朽の有無

部位	地上2.5m内樹皮	原因	腐朽菌の侵入	程度	幹周2.2m
手当の経過					

○ 生物的要因（過去の被害歴含む）

項目	種類	部位	程度
病害 虫害 鳥獣害 菌害 その他	材質腐朽菌(サルノコシカケ菌)	根元付近	2箇所（地上10cm）

○ 環境的要因

周囲(半径50ｍ)の土地改変、構造物の有無	参道の法面に生育している。直下にU字側溝あり。
周囲(半径20ｍ)の植生	キヅタ、ジャノヒゲ、アズマネザサ、ほかの草本類は異常無降雨のため枯死。

○ 土壌の状態

土壌深	土色	腐植	土性	硬度	構造	石礫	水湿	根系	PH
A層5㎝	暗褐色	含む	埴質壌土	堅	堅果状	富む	乾	多	

○ 管理状況

整枝・剪定	施肥	消毒	工作物
－	－	－	－

○ 総合所見

一般に樹皮は外樹皮（死んだ師部）と内樹皮（生きている師部）から成り立っており、さらにその内側にコルク層、コルク形成層がある。このイチョウの場合は、内樹皮が腐朽菌に侵されたもので、放射組織と形成層の交わった部分から発根した不定根がこの腐朽部分に展開している。したがって外樹皮は樹幹から遊離しているが形成層に異常がないため樹体は健全である。現在コルク層に亀裂が生じ、樹皮を再生しつつある。

したがって、これの処置は7～8箇所から出ている不定根の地下部への誘導と樹皮の再生力を旺盛にすることである。

また、ここの土壌は栄養となる腐食に乏しいため有機質による土壌改良を行う。

○ 対策

① 遊離している外樹皮を剥皮して、内樹皮の腐朽部分をコルク層と根系に傷をつけないように水とブラシで洗浄する。

② 充分乾かした後、防菌防腐剤のトップジンMペーストを塗布する。

③ コルク層と不定根を保護するため、露出部分を化土（泥炭土）で厚さ3㎝に被覆する。

④ その上をムシロ（カマスの解体したものでよい）で覆い、縄で抑える。

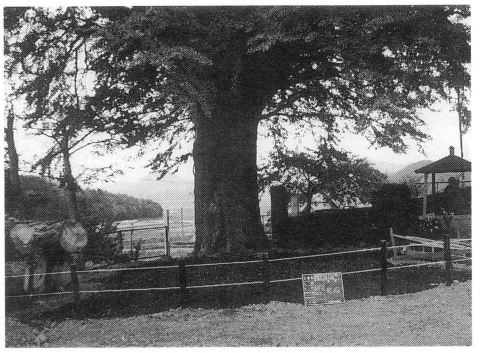
⑤ 土壌改良は、根の周囲4～5ｍをバーク堆肥でマルチングする。

〈吉祥寺イチョウ治療事業〉

▶枝抜痕の洗浄

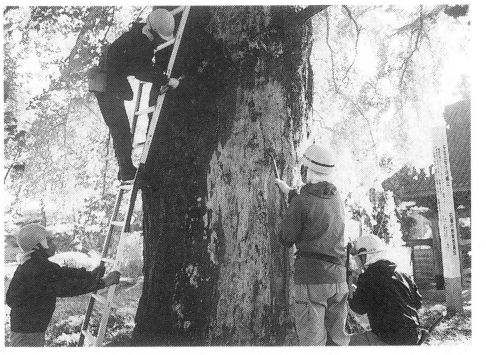
◀枝抜痕への発泡ウレタン充填作業

▶土壌改良作業

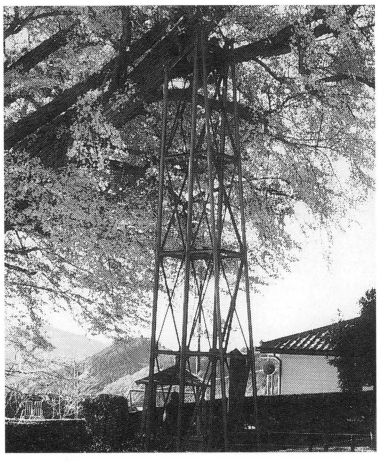


◀治療作業終了

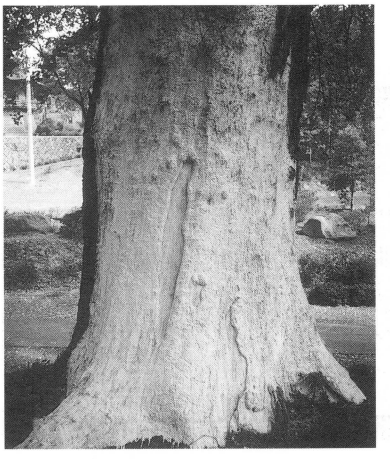
〈龍泉院イチョウ治療事業〉



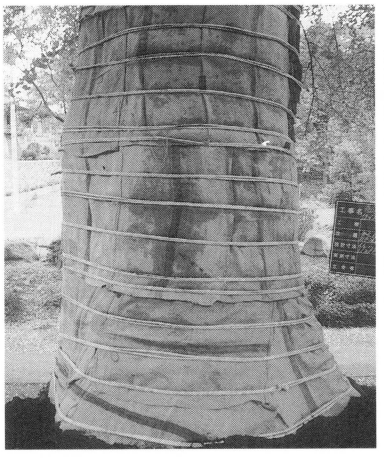
▶腐食部切除



◀支脚設置状況



▶防菌防腐剤塗布



◀被覆して治療終了

平成六年度文化財めぐり

平成六年度は、文化財めぐりを三回実施しました。第一回は市内渡波地区、第二回は山形県山形市・尾花沢市、第三回は、気仙沼市方面の文化財を見学し、所期の目的を達することができました。

募集に際しては、各回とも定員を大きく上回る応募があり、厳正な抽選の上で参加者を決定させていただきました。

第一回文化財めぐり
渡波の文化財をたずねて
―流留・渡波塩田の歴史をたずねて―

▶第一回文化財めぐり

月　日　十月三十日（日）
講　師　木村敏郎石巻市文化財保護委員
参加者　二十三人

午前八時五十分、さわやかな秋の風に吹かれながらJR石巻線万石浦駅前を出発。牡鹿の松・垂水囲貝塚等の説明を聞きながら、まず塩田の開発者である菊地与惣右衛門の墓所にお参りしました。

流留集会所で「つぼ打ち唄」をBGMに、松坂家に残る万石浦漁業争論絵図を素材として、塩田の範囲や規模を考えた後、いよいよ昔の塩田地域に入り、塩田跡地に建てられた万石浦小学校の郷土学習資料館を見学しました。塩田模型や作業用具・写真等を前に、講師の詳しい説明があり、皆熱心に耳を傾けていました。

しめくくりに鳥浜大明神社を訪れ、十二時十分にJR渡波駅前で解散しました。

第二回文化財めぐり
平成おくのほそ道を訪ねて
―尾花沢・山寺の文化財―

月　日　十一月六日（日）
講　師　石垣宏石巻市文化財保護委員
参加者　四十三名

俳人松尾芭蕉の生誕三百五十年（没後三百年）を記念して、山形県内に残る芭蕉の足跡をたどってみました。

午前八時二十分に市役所前を出発し、鳴子町の尿前の関を経て山形県最上町に入ると、封人の家があります。ここで芭蕉とその時代背景に関する基礎知識を吸収し、山刀伐峠を越えて尾花沢市の芭蕉・清風歴史資料館を訪ねました。

午後からは、山寺で知られる立石寺を拝観し、芭蕉発句の環境を堪能しました。おくのほそ道の最後は、芭蕉記念館の見学でしたが、帰りの車中では、参加者一同すっかり俳人になった気持ちで句を詠むなど、和気あいあいのうちに、午後六時二十分、石巻に帰着しました。

◀第二回文化財めぐり

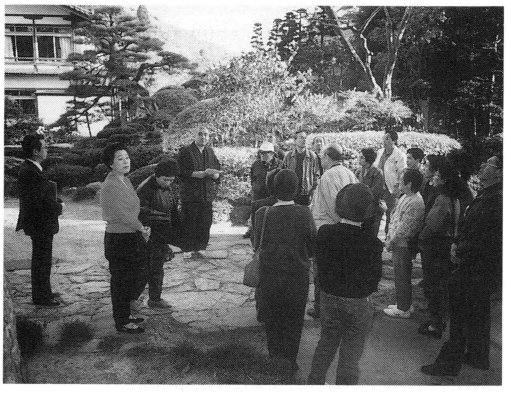
第三回文化財めぐり
気仙道を訪ねて
―気仙沼の文化財―

月　日　十二月十日（木）
講　師　石垣宏石巻市文化財保護委員
参加者　三十四名

午前八時三十分に市役所前を出発した一行の最初の目的地、陸中海岸国立公園の名勝岩井崎は、やや風が強いものの、美しい海原が広がっていました。

煙雲館は仙台藩の重臣鮎貝氏の居館で、歌人落合直文の生家としても知られています。当日は、ご当主の鮎貝盛益氏から直接ご説明いただきました。続いて見学したリアスアーク美術館は開館したばかりで、規模の大きさに圧倒されました。

浮見堂を車中から眺め、昼食後に訪ねた観音寺は延暦寺の末寺で、伝教大師の不滅の法灯を今もともし続けています。また補陀寺の六角堂は、気仙大工の手により建築され、形式的にも技術的にも貴重な建築物です。午後五時三十分石巻着。



▶第三回文化財めぐり

文化財標柱・説明板設置事業

文化財を大切にしましょう

石巻市内には、国指定文化財が二件、県指定文化財が三件、市指定文化財は二十二件あります。そのほかに約百か所の周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）があります。

石巻市教育委員会では、こうした文化財が存在することをみなさんにお知らせするために、標柱や説明板を設置する事業をすすめています。

これら文化財として指定もしくは登録されている物、土地は、全人類共通の財産です。したがって、こうした文化財の現状を変更しようとするときは、法律や条例にもとづく届け出が必要です。特に周知の埋蔵文化財包蔵地（遺跡）で、土木工事や住宅建設等を計画したときは、できるだけ早い段階で石巻市教育委員会に相談してください。

文化財を保護することは、先祖から伝わった財産を子孫に継承することばかりでなく、私達の世代の文化を子孫に伝えて行くことをも意味しています。ですから、目先の利益にとらわれることなく、広い視野を持ち将来のことを十分に考えて、文化財の保護・保存と開発を両立させて行かなければならないのです。

平成六年度は、文化財の説明板を二基、標柱を三本設置しました。設置にあたりご協力をいただいた関係各位に、お礼申し上げます。

【説明板】

石巻市指定文化財　**葛西椀**

安永二年（一七七三）の書上によれば、坊沢山龍洞院は大永七年（一五二七）に大円文誉和尚によって開山された、と言われている。

勅賜仏照禅師大円文誉和尚は、中世石巻地方を支配した葛西氏第十五代当主葛西晴胤の叔父であったことから、龍洞院所蔵の葛西椀は葛西氏から贈られたものと伝えられている。

この葛西椀は、飯椀・身椀・菜椀の三つ組となっており、秀衡椀と言われる椀類に属していると考えられていた時期があった。

秀衡椀は、当初奥州藤原氏時代の発祥であろうという推測から、藤原秀衡にちなんで秀衡椀と命名された。しかし、その後、分布地域が旧葛西領であること、模様に葛西氏の家紋「三つ柏」を用いたものが多いこと、民間所蔵者の先祖が旧葛西氏の一族・家臣であること等が明らかになり、秀衡椀の製作は葛西氏時代になってから盛んになったと考えられることから、「葛西椀」と呼ばれるに至った。

龍洞院所蔵の葛西椀の材質は、ケヤキの良質のものと思われ、柾目の立派な材料を使っている。また十二弁の菊と州浜（すはま）、源氏雲の広がり等の意匠はかなり簡略化され洗練されており、この形式のかなり円熟期のものと思われる。製作年代については、室町末期から桃山時代と推測されており、葛西氏と石巻の関係を考える上で、重要な位置をしめる中世末期の遺品である。

宮城県指定文化財

鳥屋神社奉納絵馬

『奥州石ノ巻図』

石巻は、川村孫兵衛重吉（しげよし）の北上川改修工事以来、仙台藩の江戸廻米の基地として発展を続け、また南部、一関各藩の北上川舟運の基地として、同時に東北地方への江戸文化流入の玄関口として非常な賑わいを見せた。

延喜式内社鳥屋（とや）神社の奉納絵馬『奥州石ノ巻図』は、当時の石巻の賑わう様子を蒔絵風に描き出したものである。

黒漆地に金、銀、朱を用いた華麗な絵馬は、港町石巻の肖像画としてばかりでなく、水運関係資料として、また美術工芸品としても県内に数少ない優品の一つである。縦八十六・三cm、横百三十五・五cmの画面の中央に北上川と中瀬が描き出され、河口から入港し、または停泊し、荷役する二十数隻の千石船、湊と門脇に立ち並ぶ米蔵群や屋並などの様子は、「数百の廻舟入り江につどひ、人家地をあらそひてかまどの煙立ちつづけたり……」（『奥の細道』）と松尾芭蕉が記した情景そのものである。

この絵馬は、石巻中町の総若者中によって文化二年（一八〇五）八月十三日に奉納されたものである。作者は会津若松生まれの蒔絵師・長谷三吉衛門義一であることが、絵馬の裏書によって知られる。

【標柱】

湊小学校遺跡

過去に蕨（わらび）手刀（六～七世紀頃の柄がワラビのような形をしている刀）が出土している遺跡で、隣接する五松山洞窟遺跡との関連が注目される。

久米幸太郎仇討の地

新発田藩士久米幸太郎は、父の仇敵滝沢休右衛門を苦労の末に探しあて、安政四年（一八五七）十月九日、ついにここ祝田浜において討ち果たしました。文化十四年の事件発生から四十一年目、史上二番目に長い仇討で有名なこの久米幸太郎仇討事件は、その後菊地寛、長谷川伸等の小説の素材として取り上げられています。

若宮丸遭難供養碑

石巻の「若宮丸」（八百石積、十六人乗組）は、寛政五年（一七九三）十一月末に石巻を出帆し、塩谷岬沖で暴風雨のため遭難してアリューシャン列島に漂着しました。乗組員一行は、その後ペテルブルグでロシア皇帝アレキサンダーI世に拝謁し、帰国を希望した四人が文化元年（一八〇四）九月に、十年ぶりで日本に帰ってきました。四人は、日本人として初めて世界一周した船乗りです。

旧町名表示石柱設置事業

由緒ある町名を後世に

昭和三十七年に「住居表示に関する法律」が制定されてから、昔からの由緒ある町名が新しい町名に置きかえられるようになり、古い町名はそこの住民からも忘れられてしまう状況になりました。石巻市も例外ではありません。町名は、私たちの祖先がその土地とどのようにかかわってきたかを知る重要なてがかりであり、かけがえのない文化財です。

今、日本各地では、町名も歴史的地名であり無形の文化財であるという認識に立ち、由緒ある町名を何らかの形で保存しようという運動が起こっています。

石巻市教育委員会では、すでに使われなくなったり忘れ去られた由緒ある町名を後世に伝えるため、古い町名とその由来を石に刻んで建立する事業を、昭和五十六年度から行っています。平成六年度は、二本の石柱を設置しました。

設置にご協力いただいた関係各位に、厚くお礼申し上げます。

善海田

かつては、この一帯の微高地に集落が発達し、周辺には田が広がっており、その中に善海明神が祀られていた。善海明神社は、川口明神社とするのが正式な名称のようである。北上川の河口に近いところからこの名となったらしいが、安永三年（一七七四）の慶学院書出では「川口與志宇美明神」と呼んでいたことが知られる。善海明神社周辺の広大な地域の地名は、善海明神に因んで善海田と名付けられたと考えられる。

（南浜町東公園に設置）

御所浦

延元三年（一三三八）九月、義良親王（のちの後村上天皇）と北畠親房ら一行は、伊勢（三重県）から奥州への船旅の途中、遭難。常陸（茨城県）に上陸した親房は、親王が牡鹿郡に着いたかもしれないとして結城親朝に安否を尋ねた。御所浦は、親王の仮寓に関連する地名であると伝えられている。御所の地は不明であるが、湊地区の伝承では護良親王の流寓先であると伝え、御所浦には護良親王の護衛にあたった忠臣の家々を祀る朝臣宮がある。

（川口町一丁目朝臣宮前に設置）

第41回文化財防火デー

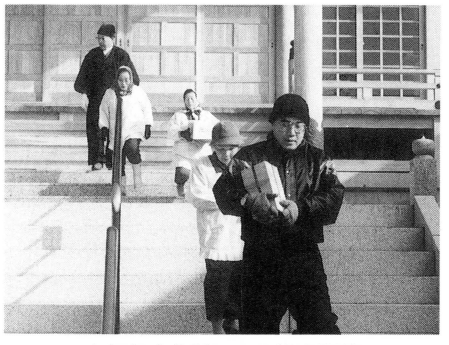
毎年一月二十六日は、「文化財防火デー」となっています。これは、昭和二十四年一月二十六日に法隆寺の金堂壁画が焼損したことがきっかけとなり、昭和三十年に定められたものです。

文化庁、消防庁では、国民一人ひとりに文化財愛護を再認識していただくことを主眼に、この日を中心として全国的に文化財の防火運動を展開しています。

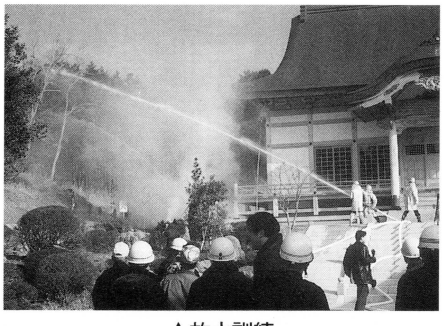
石巻市でも、「文化財防火デー」の趣旨を尊重し、毎年市指定文化財とその所有者及び地域住民のかたがたを対象に、防火訓練を実施しています。平成六年度は、市指定文化財「葛西椀」を所有している、大瓜字棚橋の龍洞院で訓練を実施しました。

平成七年一月二十六日午前十時、乾燥・強風の両注意報発令中、龍洞院北側山林から出火し、本堂に延焼する危険が迫った、という想定で訓練が開始されました。一一九番への通報訓練、仮想文化財による搬出訓練、消火訓練と、通常の火災と全く変わらない真剣な訓練が続きました。

龍洞院とその檀家の皆さんをはじめ、地域住民のかたがた、そして石巻市消防団、石巻消防署中里出張所等、多くのかたがたにご参加・ご協力をいただき、午前十一時三十分に訓練は無事終了しました。



▲仮想文化財による搬出訓練



▲放水訓練

平成六年度 石巻市文化財パトロール事業報告

宮城県教育委員会が事業主体となって実施する文化財保護管理指導事業（文化財パトロール）は、遺跡の現状や遺物散布状況の観察等をとおして、遺跡の保護管理を適切に行おうとするものです。

平成六年度の石巻市文化財パトロールは、平成六年一一月一四日から一六日までの三日間実施し、一本杉貝塚・狢坂山経塚・青木浜遺跡・スケカリ浜遺跡・出雲館跡、そして国指定史跡沼津貝塚を対象としました。

1　一本杉貝塚（遺跡番号65045）

所在地　石巻市渡波字須崎浜

万石浦南岸の海浜入江に立地し、標高約一㍍の畑地に遺跡が広がっています。かつては、貝殻にまじって土師器・須恵器片が散布していましたが、今回のパトロールでは貝殻・遺物の散布は確認できませんでした。しかし、過去に製塩土器片が発見されていることから、製塩遺跡の可能性が考えられています。

2　狢坂山経塚（遺跡番号65072）

所在地　石巻市渡波字狢坂山

狢坂山南端の丘陵尾根西端部にある、三基の土まんじゅう型をした塚です。直径はいずれも二～三㍍、高さは一・二～一・五㍍程度です。経塚であろうと言われていますが、中世～近世の民間信仰に関係した塚の可能性も考えられます。

▶狢坂山経塚

3　青木浜遺跡（遺跡番号65073）

所在地　石巻市渡波字青木浜

万石浦南岸、女川町猪落に近い海浜入江に位置し、標高は約一・五㍍程です。過去に、土師器・須恵器片、製塩土器片が採集されています。中でも製塩土器片は薄手のもので、内側に粗いハケ目があることから、奈良時代のものと推定されています。青木浜遺跡も、一本杉貝塚と同様、製塩遺跡の可能性が考えられます。

4　スケカリ浜遺跡（遺跡番号65093）

所在地　石巻市狐崎浜字スケカリ

狐崎から福貴浦に通じる道路の南側、海岸段丘上に形成された遺跡です。昭和四九年頃の道路拡幅工事のため、遺跡の大半が消滅してしまいましたが、今回のパトロールの結果、海浜部から土師器片を採集することができ、完全に消滅した遺跡ではないことがわかりました。

5　出雲館跡（遺跡番号65087）

所在地　石巻市沼津字越田

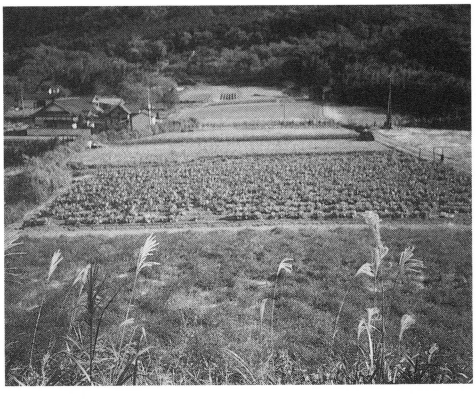
沼津貝塚の北約一二〇㍍の丘陵部に位置し、標高は丘陵頂部で二五㍍程度です。中世の館跡と考えられますが、丘陵頂部の平場や曲輪と思われる段築が見られるのみで、明確な遺構は確認できませんでした。出雲館跡がある丘陵の北端部分は、土取り作業のために削平されており、今後遺跡の保存上注意する必要があります。

6　沼津貝塚（遺跡番号65030）

所在地　石巻市沼津字出外・字八幡山

昭和四七年一〇月に国指定史跡に指定された、大規模な貝塚です。中央部を走る道路によって東西に分断されていますが、貝塚の保存状況は大変良好です。今回のパトロールは、貝塚西側を中心に行いました。遺物は全て縄文時代のもので、畑地一面に散布している様子を確認することができました。

▶出雲館跡



◀沼津貝塚

石巻市内所在指定文化財一覧

（平成７年３月現在）

≪国指定文化財≫

名称	員数	指定年月日	所在地	所有者	時代
重要文化財　岩版	1	昭36.2.1	石巻市住吉町一丁目８－29	毛利　伸	縄文
史跡　沼津貝塚	1	昭47.10.21	石巻市沼津字出外		縄文～弥生

≪県指定文化財≫

名称	員数	指定年月日	所在地	所有者	時代
牡鹿法印神楽	1	昭46.3.2	石巻市湊字牧山１－１	（代表）桜谷守雄	近世
仁斗田貝塚	1	昭50.4.30	石巻市大字田代浜字仁斗田		縄文
鳥屋神社奉納絵馬『奥州石ノ巻図』	1	昭63.11.29	石巻市羽黒町一丁目７－１	鳥屋神社	近世

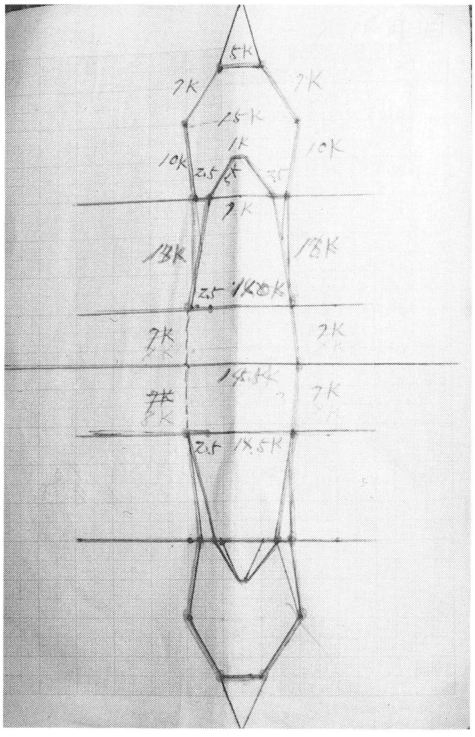
≪市指定文化財≫

名称	員数	指定年月日	所在地	所有者	時代
多福院板碑群	88	昭50.6.1	石巻市吉野町一丁目１－９	多福院	中世
平塚ツナ家文書	739	（第１次）昭51.6.1（第２次）昭53.4.1	石巻市南浜町一丁目７－30	石巻市	近世
旧石巻ハリストス正教会教会堂	1	昭55.12.20	石巻市中瀬３－18	石巻市	近代
潮音	1	昭55.12.20	石巻市南浜町一丁目７－30	石巻市	現代
イチョウ（吉祥寺）	2	昭55.12.20	石巻市高木字寺前48	吉祥寺	
イチョウ（龍泉院）	1	昭55.12.20	石巻市水沼字天似113	龍泉院	
葛西椀	3	昭56.5.18	石巻市大瓜字棚橋168	龍洞院	中世
黒潮閑日	1	昭56.5.18	石巻市南浜町一丁目７－30	石巻市	現代
石巻市渡波獅子風流	1	昭56.12.19	石巻市渡波字西ヶ崎11	（代表）津田富士義	
漁夫像	1	昭57.12.15	石巻市南浜町一丁目７－30	石巻市	現代
宝筐印塔	1	昭61.12.1	石巻市湊字牧山５番地	零羊崎神社	近世
相輪樘	1	昭61.12.1	石巻市湊字牧山５番地	零羊崎神社	近世
零羊崎神社奉納絵馬（白馬の図）	1	昭61.12.1	石巻市湊字牧山５番地	零羊崎神社	近世
零羊崎神社奉納絵馬（黒馬の図）	1	昭61.12.1	石巻市湊字牧山５番地	零羊崎神社	近世
長禅寺「扁額」	1	昭61.12.1	石巻市湊字牧山５番地	零羊崎神社	近世
銅造菩薩立像	1	平元.7.31	石巻市渡波字仁田山２	洞源院	古代
銅造薬師如来立像	1	平元.7.31	石巻市高木字竹下75	日野孝栄	中世
銅造阿弥陀如来立像	1	平元.7.31	石巻市高木字竹下75	日野孝栄	中世
銅造観音菩薩立像	1	平元.7.31	石巻市高木字竹下75	日野孝栄	中世
木造観音菩薩坐像	1	平元.7.31	石巻市羽黒町一丁目１－27	永巌寺	古代・中世
木造薬師如来坐像	1	平元.7.31	石巻市真野字萱原２	長谷寺	中世
渡波塩田つぼ打ち唄	1	平４.6.1	石巻市流留字赤坂前７－１	阿部亀雄	

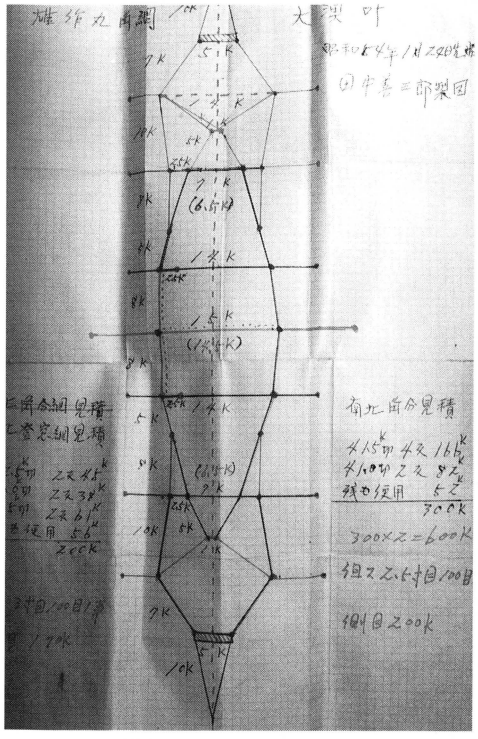
7	技術修得過程	職能分担過程	同業者の組織
職人の職能・組織	1）小学校高等科を卒業すると親方(師匠)の家に弟子入りする。期間は5年から7年で一人前の網師になる。 2）その後、1年間はお礼奉公をする。(田中氏は3年で技術を習得した。特に弟子期間は本人の習得能力で早められる場合がある) 3）一人前の網師になると組合に加入した。	本人の技術習得能力に応じて仕事が与えられ、特に定められたものはない。	網師組合（昭和23年ごろ自然に消滅した）

8	衣食住生活	年中行事・生産暦	信仰儀礼・禁忌伝承	符丁・教え方など	仕事歌
職人の生活	徒弟奉公は、一般にどの職人も地獄も同じであった。経済的に苦しかったから、盆、正月に労働賃金が払えない場合、親方に金をとりにやられ失敗すると怒られた。 奉公の時、大工などとちがって、道具がないから寝巻だけを持っていった。行った家のなかには寒い冬にふとんがないのでコザにくるまってぶるぶるふるえながら寝た。 私の親方(師匠)はできた人だから弟子に苦労はさせなかった。師匠から常に「人にたよるな」と教訓され、今でもそれをモットーとして生きてきた。	・鋏入れ 正月の早い時期に良い日を選んで行う。網に鋏を入れるまねをして、神棚に塩・豆を供えて拝む。 ・網が完成した時 餅をついてまき、網に御神（心）を入れるため、神酒を振りかけてお祝いする網主もあった。 自分はやっていない。	ない	テイタ（手板）…設計図 イヤを入れる…網にたるみを持たせることを言う。 3割のイヤを入れるということは10間の長さの網を用いて3割つまり3間ゆるめて、7間の長さに網を仕上る。 ササ…昇り網の勾配 ミミ(耳)…網の両端をいう。 クヅ(口)…1反の網の幅、目数で表わす。1反の長さには定まった長さがない。	ない

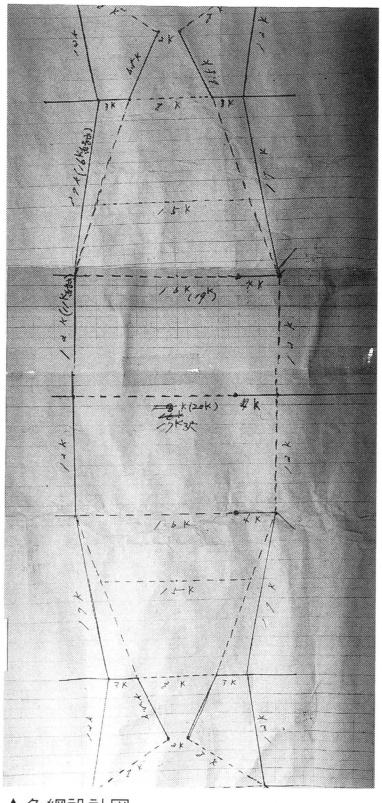
9	技術伝承上の問題点	用具類等の収集・保存の実態・可能性	従来の主要参考文献
その他	網師の需要が減退し、また戸外での地味な労働条件を嫌う青年が増え、後継者が育つ見込はない。 網そのものの製作は単純な作業であるため秀れた設計書さえあれば、工場でも網主にでも誰にでも製作出来る。	収集は可能である。	明治43年発行 宮城縣水産試験場『宮城縣漁業基本調査報告書』第二巻 昭和7年発行 厚生閣、長棟暉友著『最新漁撈学』 昭和50年発行 東洋経済新報社 末広恭雄編集『水産ハンドブック』 昭和51年発行『宮城県民俗資料緊急調査報告』－谷川(鈴木東行調査) 昭和63年発行『牡鹿町誌』上巻 平成2年3月発行 東北歴史資料館『宮城県の諸職』



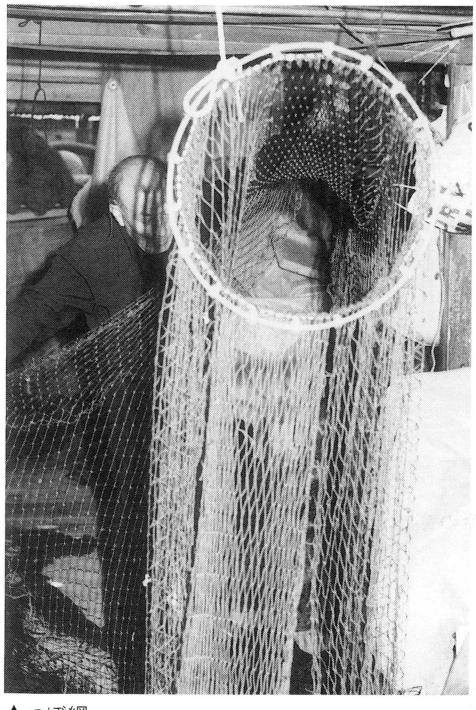
▲17間角網略図



▲23間角網略図



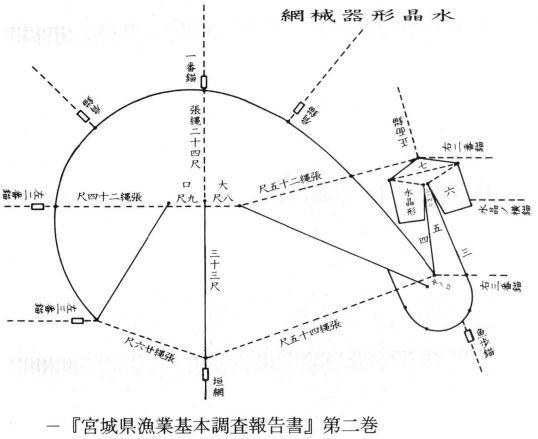
▲角網設計図



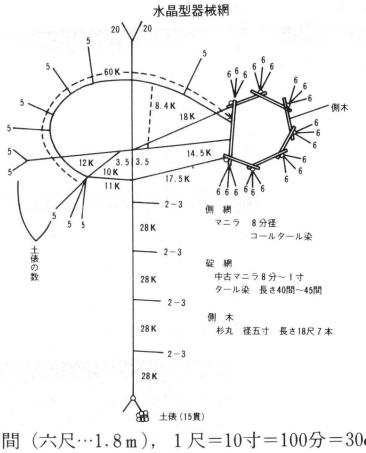
▲つぼ網

6	種　　類	名　　称	用　　途	年間総生産量	収納保管、商圏、販売方法、決済方法など
製品	定　置　網	水晶型器械網	イワシ、サバ、サケ、スズキ、アオ、イカ、タラ、タイ、サヨリの漁獲	昭和43年を最後として受注はない。	• 作業小屋、納屋に収納保管 • 昔は青森県八戸市まで出掛けたが、最近は県内だけ。田中は名取閖上方面に２月～11月まで出稼。 現在は谷川で製作している。 特に名取閖上の網主の受注をうけている。 • 販売方法 田中氏の場合は請負受注で網100間につき２～2.5人、１人の賃金は8500円前後である。材料費、賃金と共に完成納入時に受け取る。 • 網は一度作ると６年～９年（昔は３年）もつので、年間の主なる仕事は網の修理の方が多い。
		鮭角網（さけかく） （両口、両落網）	鮭の漁用	名取閖上方面より受注製作(1人で)、５年前は年間２～10把であったが現在は３年位おきに受注	
		落　網 （両口、両落網）	両方向よりの潮流がある所に設置。イワシ、サバ、イカ、アジ、タラ、サヨリなど	昭和50年頃、渥美武三郎氏が設計製作後つくっていない。	
		落　網 （片口、片落網）	潮流が一方向だけの場所に設置イワシなど水晶型と同じ漁獲	昭和60年頃、渥美一司氏が設計。田中、渥美武三郎氏と三人で製作、後はやっていない。	

特記事項・補足説明・図解・写真添付など



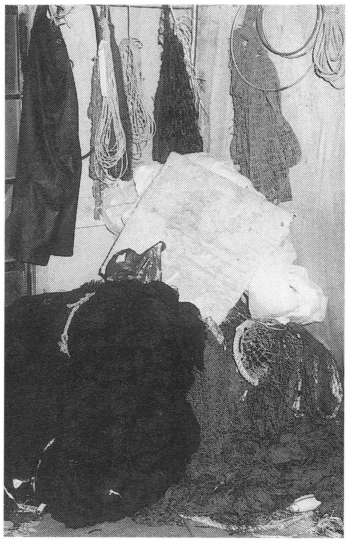
―『宮城県漁業基本調査報告書』第二巻
明治42年宮城県水産試験場より ―



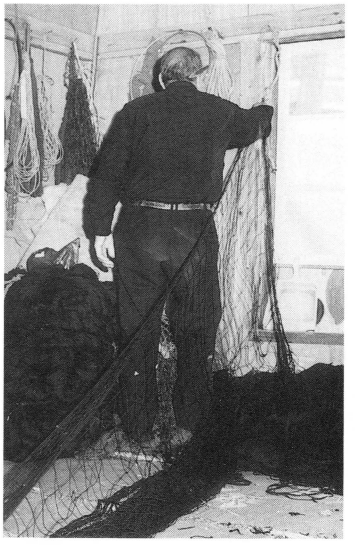
注　K…間（六尺…1.8ｍ），１尺＝10寸＝100分＝30cm
宮城県水産試験場「水晶型器械網側張図」
『沿岸漁業集約経営調査報告書第２年度』より

• 谷川浜では３年入札（３年１期で入札で買う）。
大島、前網崎・わす根・かき島・うの根など５箇所に定置され、杭に綱を通し張って上はケタに張り、ケタに張った綱をゆるやかにすれば、網が集まるようになり、網の操作は大変簡単で１～２人ででき、朝におこす舟は一艘でサッパやタナヅキでよい。

―― 話者、渥美貞司（明38．８．２生）。昭和51年『宮城県民俗資料緊急調査報告書』
（調査者鈴木東行）より ――

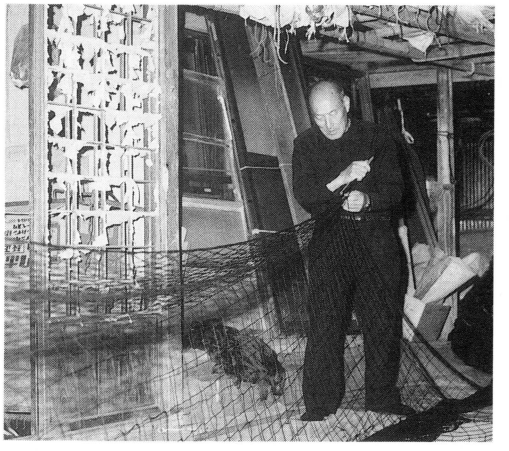


▲①



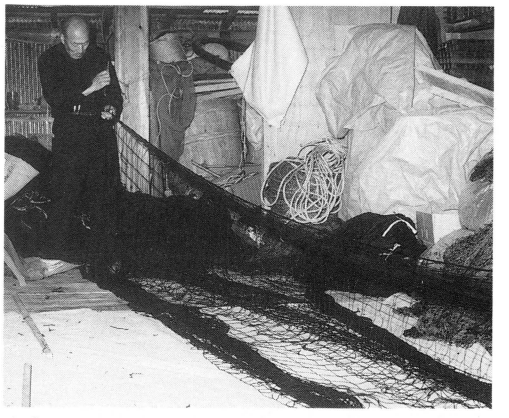
▲②

▲③



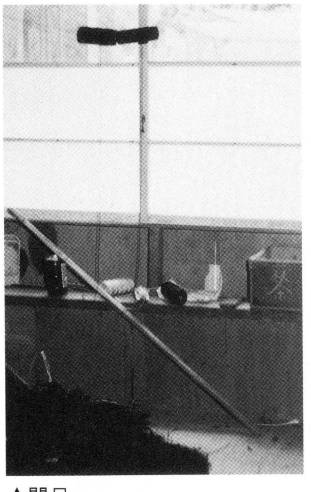
▲④

▲⑤

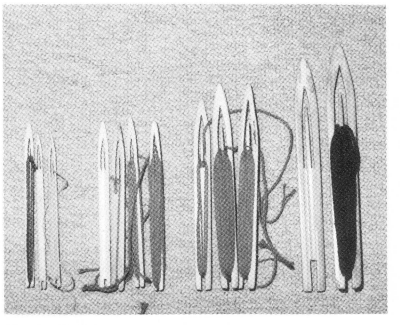


▲⑥

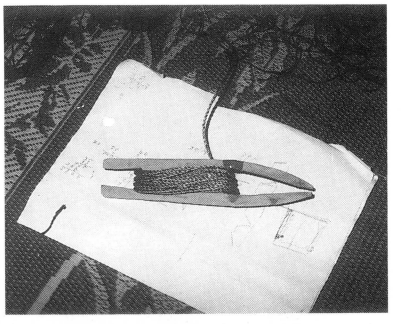
（①～⑥は作業小屋の見取図の番号）



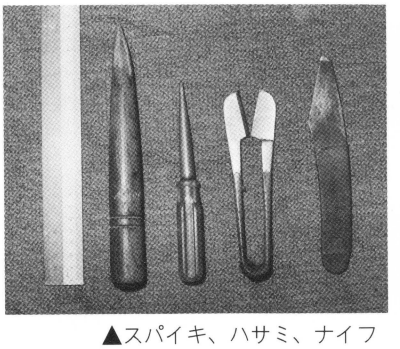
▲間尺



▲アバリ



▲ベロナシ



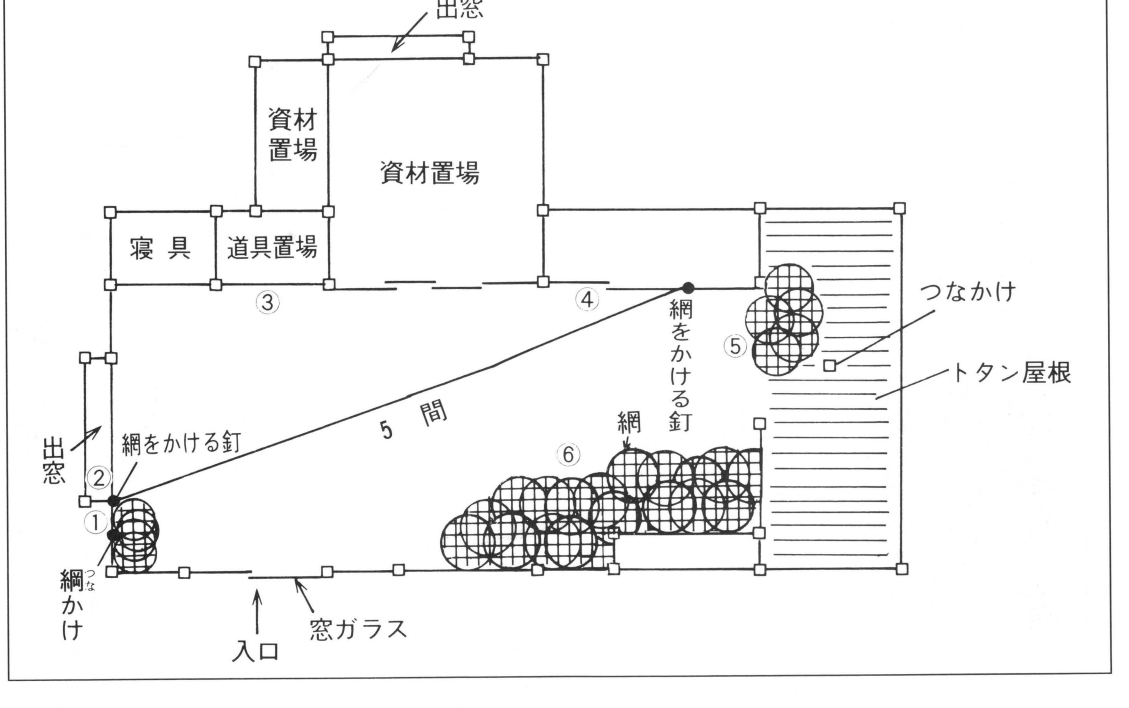
▲スパイキ、ハサミ、ナイフ

▲スパイキを使用して網をつなぐ

5．製作・加工施設

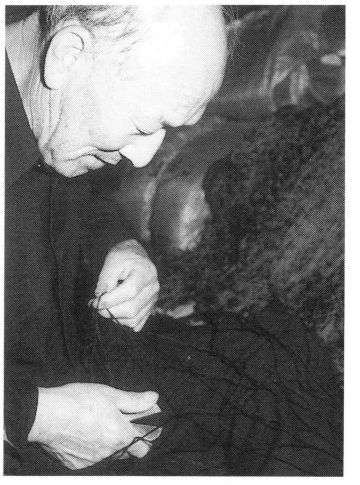
作業小屋・納屋・戸外の空地・道路脇・堤防・庭など利用して作業をする。
（雨天や風の強い日には作業小屋を利用）

作業小屋（空屋を利用して材料置場にしていた）の見取図

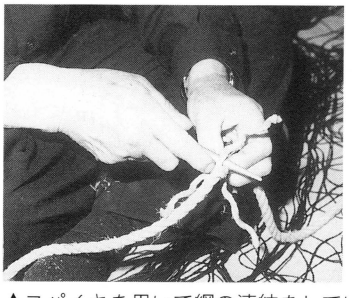


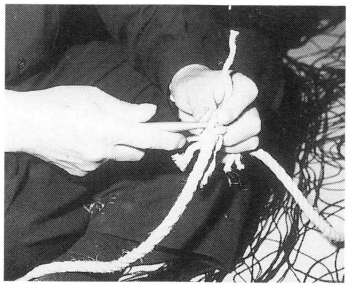
▲作業小屋で編網　①アバリを使用

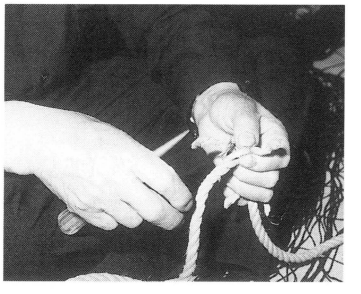
▲②



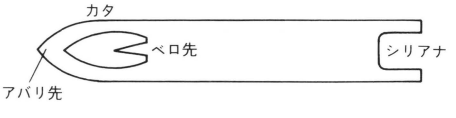
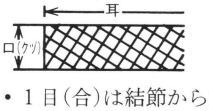
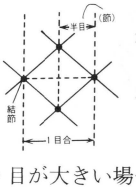
▲③ハサミを使用

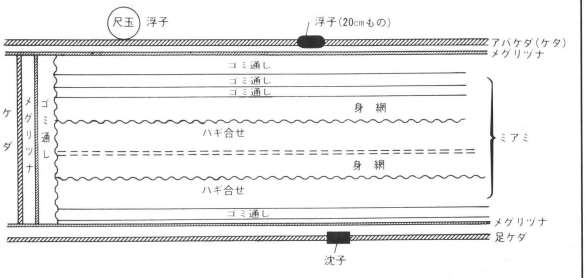


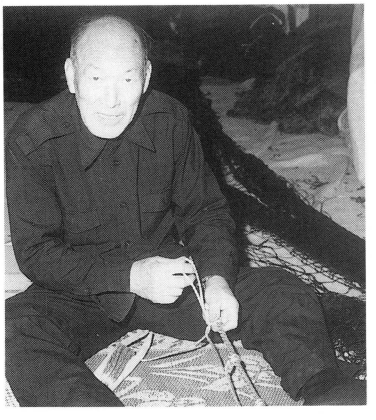
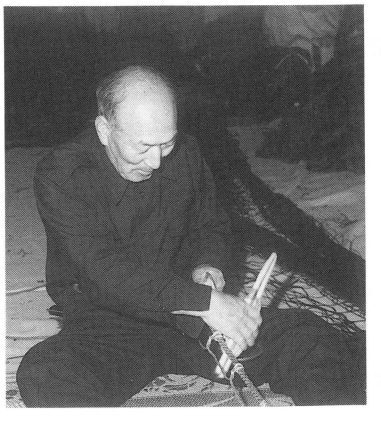
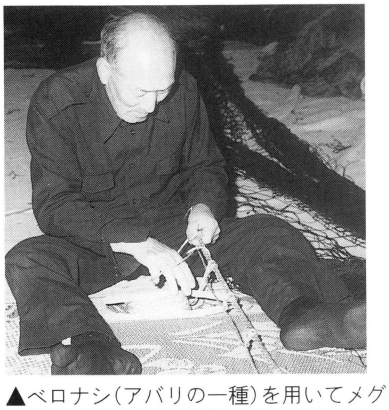
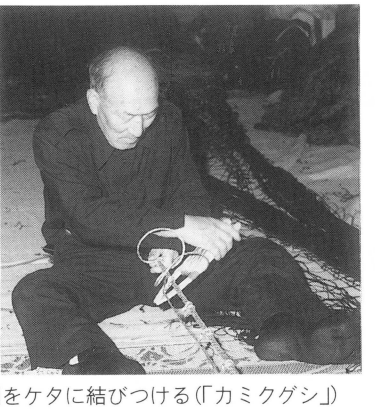




▲スパイキを用いて綱の連結をしている

4	図解・写真	寸法等にまつわる伝承
製作加工の用具	道具と用途 間尺(ケンジャク)　長さ5尺(1.5m)　1尺毎に目印(目盛)がつく クレヨン　糸に印をつける。今はサインペンを用いる アバリ　竹で自作する、網目の大きさにより各種ある 三ツ針　断面が三角形で目の細かい網に用いる ベロナシ　アバリの一種、太い網用 鋏　刃の角度が小さいのは太糸用、大きいのは細糸用 テバコ　包丁、市販、本人で自作のもの 切出し　握りにトウを巻いて使う 道具入れ　ズック袋。自作  	• 長さの基準 1間(5尺)＝1尋(ヒロ)＝1．515m 1反…ロ(クヅ)＝幅のこと。百目が標準。ロの目合が100より少ない時には「掛」を使う。30目(合)の時は30掛。30掛が1反になる。100掛という例もある。耳の長さは定まった長さがない。  • 網目  • 1目(合)は結節から対角線の次の結節までをいう。 • 1節は半目ともいい結節から結節までの長さをいう。 • 目が大きい場合 目合の長さで3寸目、5寸目などと言う。 • 目が小さい場合 網（地）の長さ5寸の間に節がいくつあるかによって8節・10節などという。

特記事項・補足説明など	図解・写真添付など
• ハギ合せる…縫い合わせる。 • ハ　　グ…ハギ合す。 • メグリ綱…縁綱（へりづな）、大敷網では「八百」又は「カゴ」という。 • カミクグシ…本来は「さつまざし」という由。 • ス　ズ　ナ…昇り網を安定させるためにオモリの輪を通した網を海底にさげる。 漁網は網地を組み合わせて、その主体である身網をつくり、これに縁網（ゴミ通し）、縁綱（メグリ綱）をつけて、いたみやすい網のふちを補強し、これにさらに浮子綱（アバゲタ）や沈子綱（足ケダ）をつけて、漁網が完成する。	

▲ベロナシ(アバリの一種)を用いてメグリ綱をケタに結びつける(「カミクグシ」)

従来の綿や麻の網地の結節には、本目（ほんめ・flat knot）と蛙又（かえるまた，trawler knot、sheet bend）の２種が使われる。本目結節は編みやすく結び目がかさばらず，４本の脚に平均に力が加わる場合は強度にすぐれるので，普通の網地に用いられるが，脚に不均一に力がかかると結節がずれる欠点がある。蛙又は比較的に編みにくく，結節がかさばるが，結節がずれにくいので，獲物をからませる刺網類は必ずこの結節で網目が作られている。一方，合成繊維はその一つの欠点であるが，結節がゆるんだり，ずれたりしやすい。そこで，編網上はたいへんめんどうであるが，蛙又結節をさらに複雑にしたような特殊の結び方を用いている。

本目　　蛙又

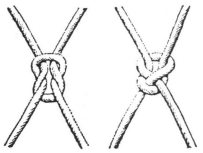
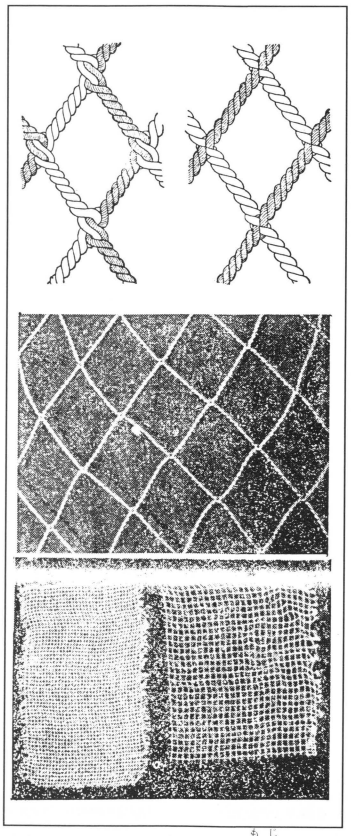
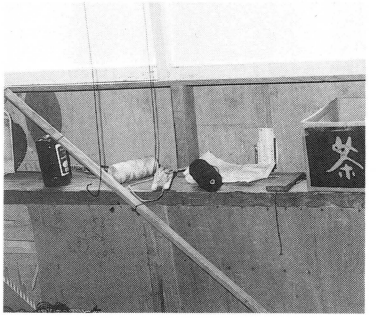


図２．２　本目と蛙又

結　　節
～『水産ハンドブック』
－東洋経済社－



▲無結節（上）、無結節網（中）、捩子（もじ）網（下）

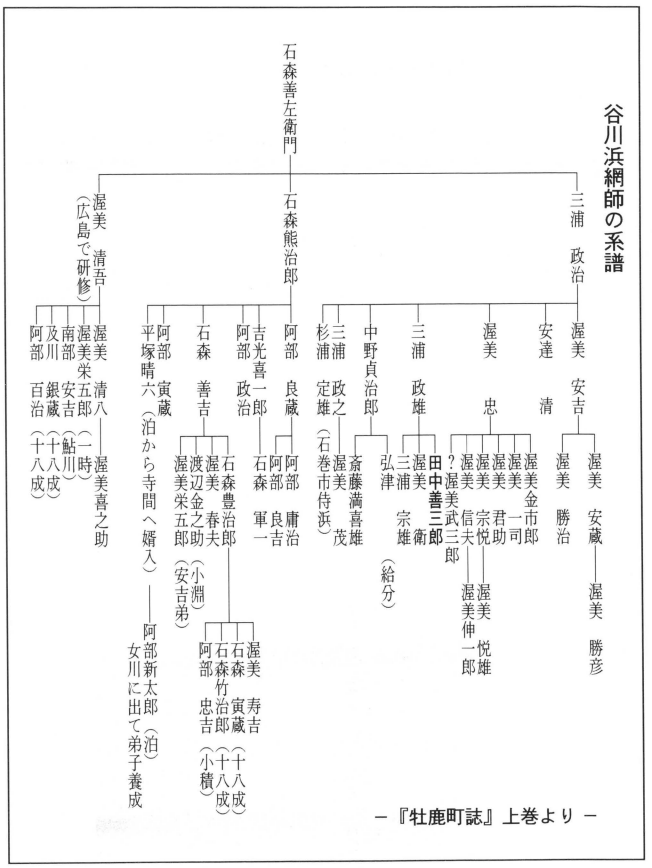


▲白色の巻糸（ハイクレー）と黒色の巻糸（パンナイロン）

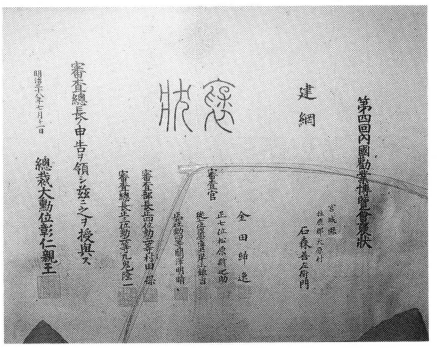
▲パンナイロンの束糸

3	製作・加工の工程（細分の工程に留意）	具体的用具名	用具の使い方・変遷・個人的工夫など
製作・加工の工程・用具	１）網元の注文に応じて設計図を作り、それにしたがって裁断する。網師が複数の場合、それぞれに分担した部分の材料を渡す。通常３人位の網師が協同して作る。	設計図、間尺（ケンジャク、５尺＝1.5ｍ）、鋏、小刀、サインペン	・昔はクレヨンで網地や綱に印をつけた。 ・箱網（イオトリ、落網）→昇り網→側網（運動場）→垣網の順で作るが、どの網から作ってもよい。
	２）身網、底網共２枚以上の網地の時には「ハギ合せ」（縫い合せ）を行う。　注（補足説明の図参照）	アバリ、鋏、小刀（デバッコ）	
	３）次にアバ側のハギロに「ゴミ通し」（目の大きい網）を１～４段取りつける。		
	４）「ゴミ通し」を「メグリ綱」に取りつける。		
	５）メグリ綱は「カミクグシ」によってケダ（アバケダ）に結びつける。最後にケダ（ケタ）にアバ（浮子）を取りつける。	アバリ、ベロナシ（アバリの一種）、スパイキ、鋏、小刀、浮子	アバ、昔は木製か竹、後にガラス玉。昭和30年代末からビニール製に変った。
	６）同じ方法でアシケダ側の身網にも「ゴミ通し」を一段つける。つぎに「メグリ綱」と「アシケタ」の順に結びつける。		
	７）アシケダは化繊系の網地が軽いので沈むように鉛綱を使っているが、さらに１間毎に40匁～100匁の鉛の沈子を取りつける。	沈子（40匁～100匁）１匁＝3．757グラム	
	８）網の両端のハギロ（くち）にも「ゴミ通し」をつけ「メグリ綱」「ケダ」の順に上記と同じような結び方で取りつける。昇（のぼ）り網の場合、両縁に沿って１～1．5間に重りの輪を通した「ススナ」をつける。		

谷川浜網師の系譜



－『牡鹿町誌』上巻より－



▲第四回内国勧業博覧会褒状

▲網師、田中善三郎の作業

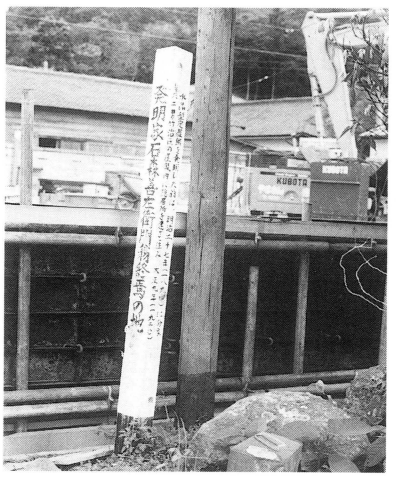
2	原材料の名称	原材料の入手方法・経路など	保存状況その他
素材（主たる素材）	網糸 1　麻 2　藁縄（垣網の目の大きい荒手の部分に用いる） 3　絹 4　木綿（綿糸） インド綿を輸入し、国内の紡績にされ、ついで撚糸にされ、網に作られる。 谷川浜では昭和25年ごろより合成繊維を用いる。 5　合成繊維 谷川浜ではナイロンが2/3、テトロンが1/3の割で使用しているが、他にハイクレ（結んでもとけ易い）・バンナイロン（結んでもとけにくい）を用いている。	1）網地 ①結節網（網糸を結んでつくる。目の大きい網に使う）＜蛙又網（とけにくい）／本目網 ②無結節網（片撚糸を機械にかけて撚糸をつくる生産段階で節をつくる）＜無結節網／もじ網 ③ラッセル網（原糸を機械にかけてレース編みのように編んで網をつくる。非常に目の細かい網ができる） 2）網地の入手経路 一般に網（地）の生産地は関西方面と富山県であるが、石巻にも製網会社がある。網の仕入れは石巻で行っている。	
素材（その他）	綱…マニラ麻、シエロ（今は使用しない）、化学繊維、鉛入り（鉛線） 沈子…鉛製40～90匁（1匁＝3．75g） 浮子…昔は木製、竹を使用。今は化繊系（直径20cm or 1尺弱などと言われる）。 縫合用糸…昔は綿糸、今はナイロン系スパンを使用。製品に巻物と束物とある。 竹、木材	竹、木材は地元、その他は石巻で購入する。	

製作・加工の概要	1．網元の注文に応じ適した設計図をつくる。 2．設計図に従って材料を購入準備する（網元が材料を用意する場合もある）。 3．網を裁断する。 材料が一度に全部そろった時には、箱網→昇り網→側網→垣網の順で作るが材料の関係でどの網から作っても差支えがない。網の大きさにもよるが通常３人位の網師が協同して作る。 4．労賃は網地100間（１間＝５尺＝1.5ｍ）につき２～2.5人で請負い、１人の作料8500円前後、製作期間は網の大小、天候等で一定しない。

図③　谷川浜の集落図、世帯主氏名、屋号

▲㉗石森善左衛門の終焉の地－『牡鹿町誌』上巻より－

▲頌徳碑



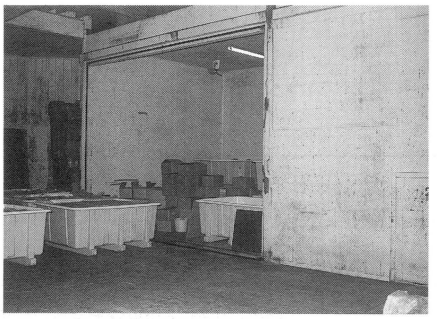
▲終焉の地の標柱

▲終焉の地の住居（改造）

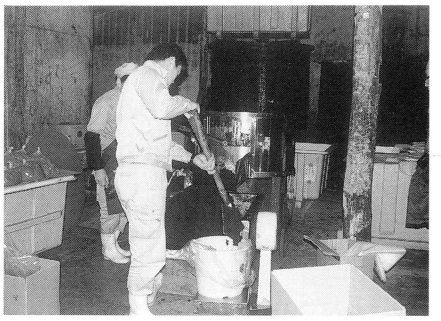
6．網　　師

調査期間	平成５年 ７月26日～ ７月29日	調査地	宮城県牡鹿郡牡鹿町字谷川浜	職種(技術)名　網大工
話　者	田　中　善三郎（75歳）　男　大正８年１月25日生			
技術伝承者(従事者)の呼称	**(通称)** 網師（あみし）	**(家名・屋号)** なし	**(その他)**	

1	地　域　的　特　色	技術の伝播(系譜関係を含む)・歴史的経緯
総観（調査地・職種〔技術〕等）	谷川浜は一般に裏浜といわれる牡鹿町の北東部、鮫浦湾の西南岸に位置し、一見農村のような谷川浜、大谷川浜と磯浜で漁村らしい祝の浜との三集落からなっている。 藩政時代の谷川浜は遠嶋随一の浜百姓であったが『牡鹿郡萬御改書上』には「百九拾八文」の海上高があり「風土記御用書出」には四板船（２艘）・大かっこ船（１艘）・さっぱ船(24艘)・かっこ船（１艘）とあり、漁船28隻、御役代一貫九百五十文を上納する漁村であった。しかし谷川浜は半島部に深く入り込んだ鮫浦湾の深奥に位置する集落であるため、こと漁業に関して湾口部の寄磯浜、泊浜、新山浜よりはるかに不利で、文久二年(1862)の「牡鹿郡十八成組濱々一ケ年出産物并金高大凡見詰調書上」(長沼文書)には、すでに鰹の漁獲高は無く、種別も次の五種だけである。一塩六ッ魚（むつうお）(八万本)・鱈(千本)・赤魚(五千本)・前海鼠（いりこ）(拾五貫)・鮹（たこ）(三百枚)、金高百弐拾五両三歩弐朱。明治十六年(1883)にイワシ建網を創業した石森善左衛門が「当谷川浜ハ古来ヨリ陸奥（むつ）魚地引網セシノミ、時季に際スレバ鰛群来スルモ捕獲ノ網ナク」(「業務の沿革」)。「当谷川浜ハ古来ヨリ鮭（さけ）地曳網ヲ使用セルモ未タ建網ノ設置ナカリシガ明治十六年ニ至り…」(「明治三十一年業務沿革」)と述べている。このような谷川浜の漁業に新風を吹き込んだのが石森善左衛門である。善左衛門は福貴浦の阿部家より出て石森和吉の養子になった人である。元来福貴浦は定置網の盛んな大原湾に面し、地先海面にはイワシ筒伏網などがあるので、善左衛門は幼少より定置網の漁村で有った人である。善左衛門は谷川浜に来て「鰛（いわし）群来スルモ捕獲の網ナク…」と慨嘆し、慶応年間(1865～８)に村網を改良して「イワシ地引網」を考案したが、この網目の大きい藁網地の地引網は、湾内が浅く、海水の澄んでいる谷川浜の漁法としては適さなかった。「日夜寝食ヲ忘レ深慮」してたどり着いたのが、生地、福貴浦や大原湾を初め表浜一帯で行われていた建網(定置網)の改良移入であった。明治16年(1883)には今までの藁と麻糸を半々に使用した網地を全部糸網に変えて建て込んだところ、イカとイワシの大漁となり八千円という当時として破天荒の漁獲高となり村民を喜悦させた。この定置網は日本最初の糸網の定置網であるという歴史的な意味を持つばかりでなく、最も適した漁法であったから、翌年には定置網の本場である表浜にも採用され、十八ケ浜23把までに普及した。後大正八年(1919)より落網に変わった。 一方、善左衛門は半農半漁の谷川浜に一層適した「資本少ニシテ人手ヲ要セズ、又魚一度入レバ出魚ノ憂ナキ簡単ナル建網ヲ」の着想を得て、明治二十年(1887)には早くも谷川浜の鷲根に新しい建網を建て込んでいる。これが石森善左衛門の名を不朽のものにした水晶型器械網である。この網は善左衛門の合理性と八年にわたる不撓不屈の努力によって明治二十八年(1895)に一応完成し、明治三十一年には北は室蘭から南は宮城郡花淵までの太平洋岸一帯に普及したが善左衛門はその後も工夫改良を加えた。谷川浜の漁業は明治十五年(1882)を境として、それまでの地引網中心の漁業から定置網漁業の時代に入り、以後はこの定置網を中心にして発展することになった。しかし地引網も定置網も漁獲物を均等に配分する村網かそれに近い網組の経営であるため、漁業資本家を生み出すこともなく、近代的な資本主義的漁業への発展も見られなかった。 大正年代から昭和十年頃までは谷川浜は石巻地方の鰛（いわし）の「ガラボシ」の特産地として栄えた。渡波の松田、三国などの仲買人が仕入れに来て12月から２月半（なか）ばまで浜の各家は昼夜も仕事に追われた。	戦前、谷川漁民の生活は自営農業に携わりながら網組員として定置網漁業の経営に参加し、またその漁獲物を加工するのが主であったが、一部には網師の賃仕事を兼業する者もいた。この谷川網師は定置網に糸網を採用した最初の人である石森善左衛門を祖としており、その発明工夫の技術的側面を分担し、漁業史に残る水晶型機械網を完成させた技術家集団でもあった。その後筒伏網や水晶型機械網の普及と共に各地にその技術を伝え、またその技術をもって賃仕事を行い生計の資としていた。現在、定置網漁業は衰退の道をたどり、また網も丈夫な化学繊維で作られ、網地も機械織りになって網師の需要も減少し、谷川では田中善三郎氏一人だけになった。 網師の系譜は 石森善左衛門－長老（３人）－網師（親方…13人）…弟子（34人）である（注…16～17ページ参照）

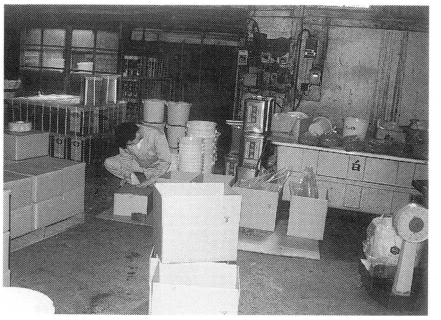


▲1．発酵室（1階）



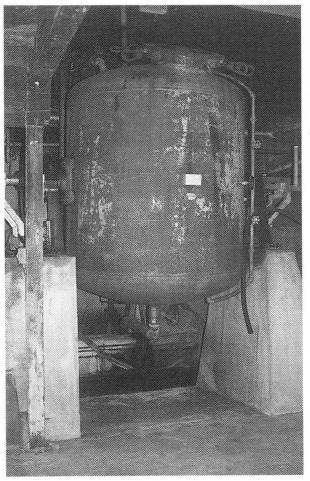
▲▼2．クロの出荷（熟成味噌）（1階）

▲昭和7・8年頃初荷（工場前にて）

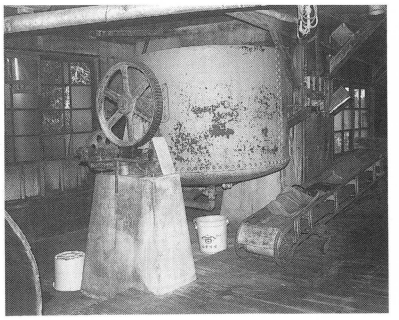


6	種類	名称	用途	年間総生産量 現在	年間総生産量 戦前	収納保管、商圏、販売方法、決済方法など
製品（味噌）	米みそ	キッコー山大みそ	家庭用 業務用（加工屋）	150トン	120トン	・昭和20年頃まで、市内と周辺の町や村に販売していたが、昭和30年代後半から市内、女川、塩釜、気仙沼、釜石、青森の水産加工屋（缶詰用）に販路を拡張した。極洋捕鯨株式会社東部支社、塩釜工場や日本水産女川工場（捕鯨会社）などその一例である。しかし南極の捕鯨禁止により現在は鴎洋水産株式会社気仙沼工場のみに販売している。また昭和42年から現在まで杜氏や従業員の出身地である水沢（岩手）方面にも販売している。 ・販売運搬は先代大輔の方針である「宅配」の主旨から昭和30年頃まで大八車を使用し、その後「運搬車」（運搬自転車…自転車の前の荷台に2斗樽をつける）で運び、現在トラックを用いている。
	赤みそ（発酵みそ）	キッコー山大みそ	同　上	150トン	120トン	
	白みそ	キッコー山大みそ	同　上	20トン	なし	
（醤油）	特級 （戦後…農林規格）	キッコー山大しょうゆ	家庭用	500kℓ	?	
	上級	キッコー山大しょうゆ	家庭用 業務用	1000kℓ	1000kℓ	
	標準	キッコー山大しょうゆ	家庭用 業務用	800kℓ	800kℓ	
	薄口（色がない）	キッコー山大しょうゆ	業務用（缶詰用）	1000kℓ	500kℓ	
	その他 さし味用（色なし）			少量		

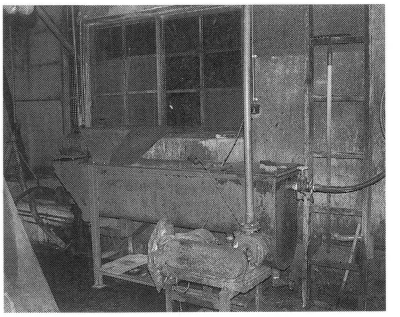
（2階）



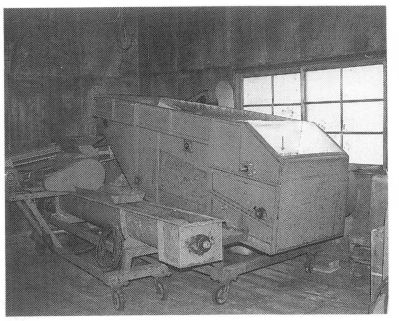
▲1．大豆蒸煮缶



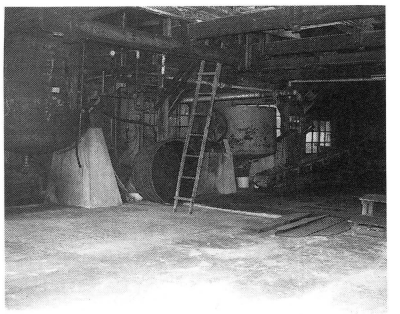
▲2．米むし機



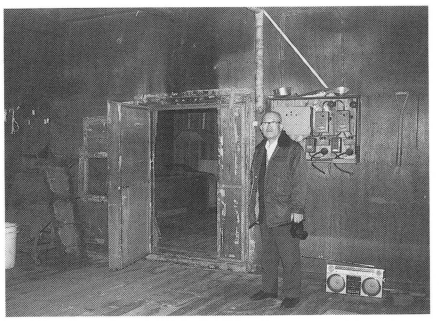
▲3．大豆洗滌機



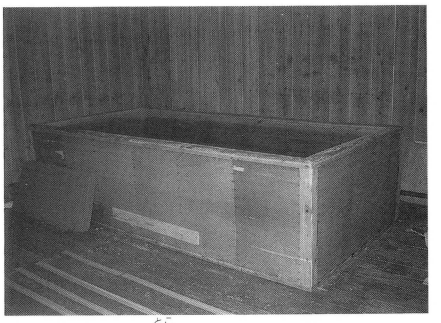
▲4．タネキリ機



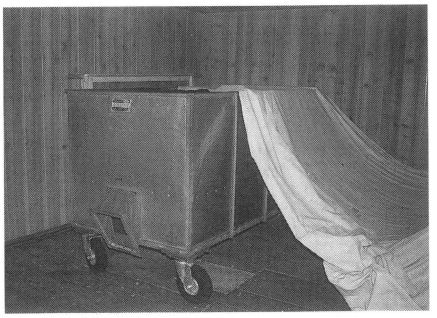
▲2階の西側の室内。2の前にハンキリ桶がある。



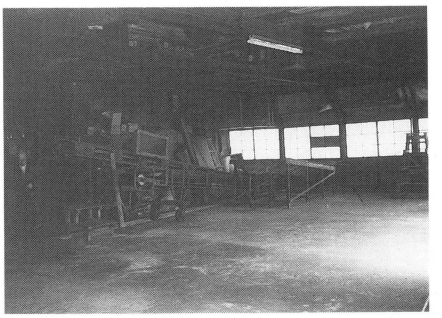
▲5．麹室入口



▲6．製麹機（床）



▲7．自動製麹機

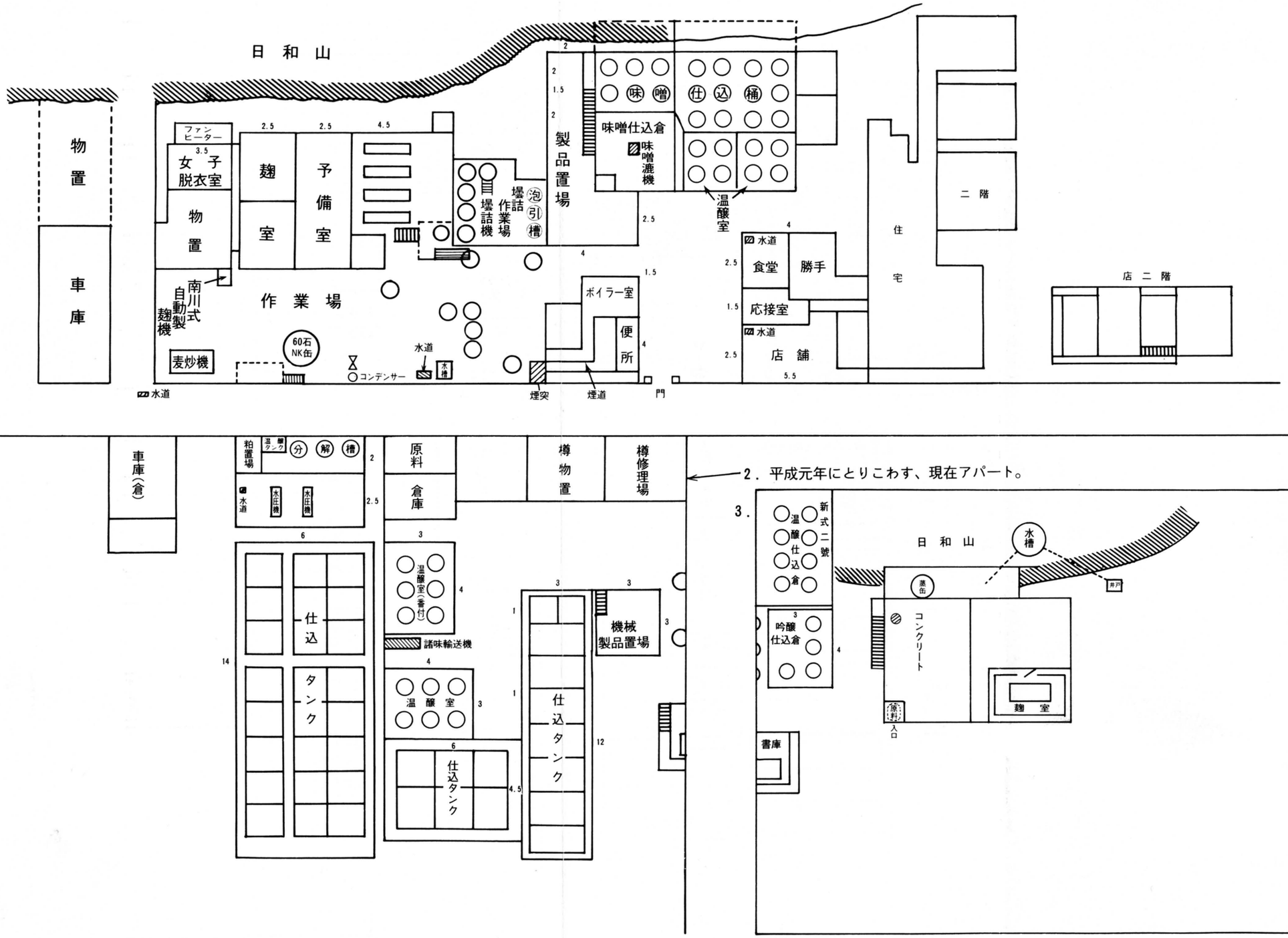


▲2階の東側の室内。ベルトコンベヤーと麹室。

5．施設

1．昭和37年頃の工場

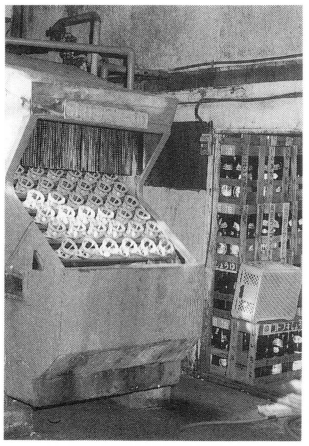
工場見取図　山形屋商店



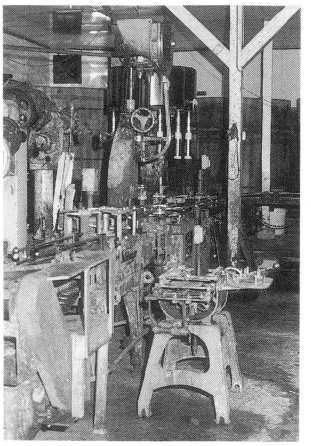
2．平成元年にとりこわす、現在アパート。

3．

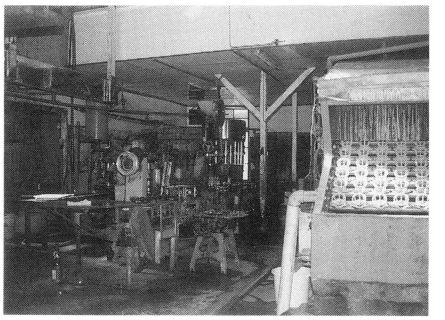
醤油（１階）



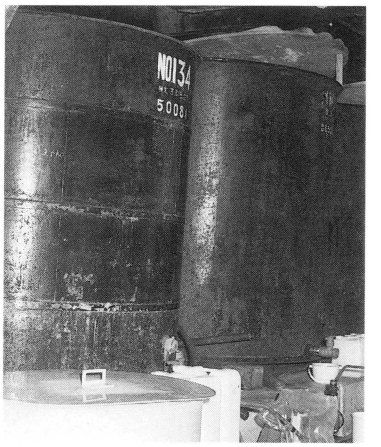
▲１．壜洗い



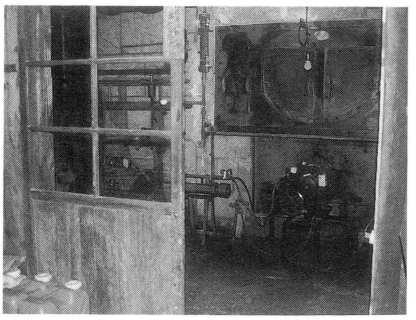
▲２．壜詰



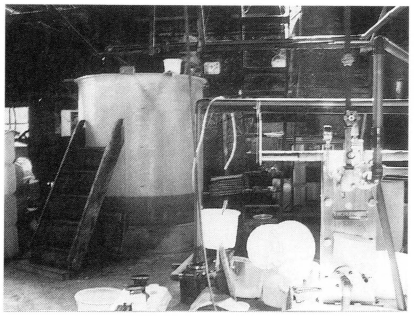
▲２と１



▲貯蔵

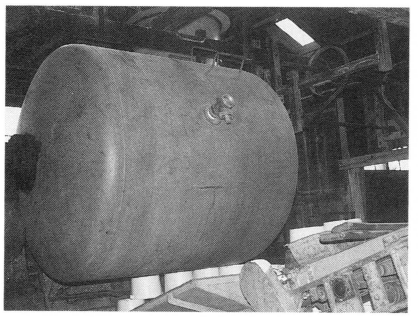


▲ボイラー

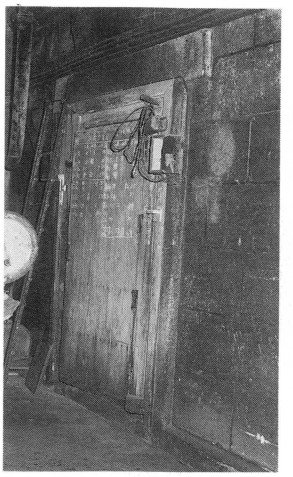


▲３．「火入れ」

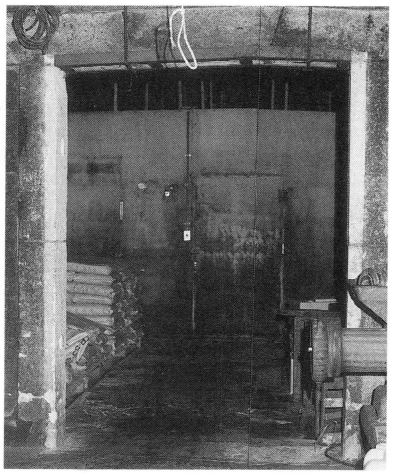
▼５．蒸煮缶（ＮＫ缶）



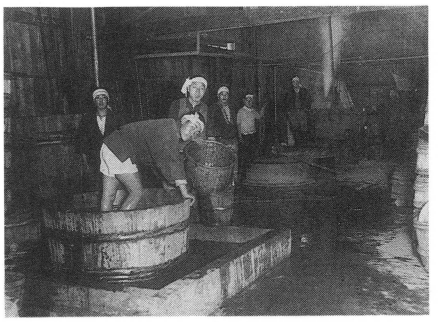
▼６．ムロ(室)入口(室とは麹室)



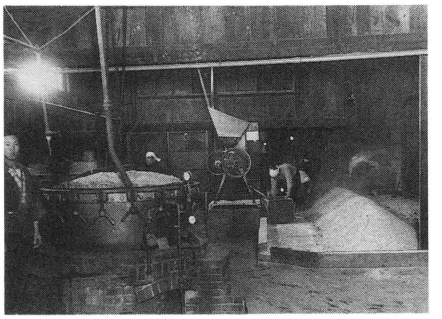
▼７．冷蔵室



昭和初頭の醸造工程の一部

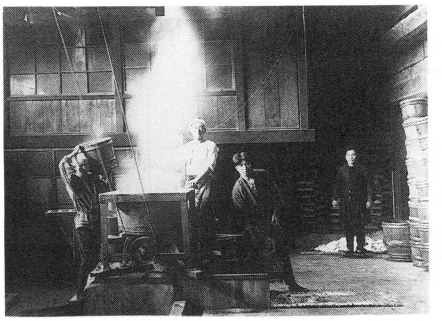


▲仕込み作業の一部

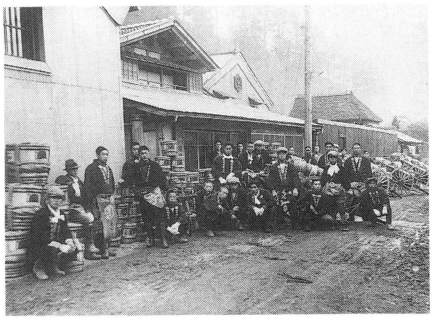


▲仕込み作業の一部

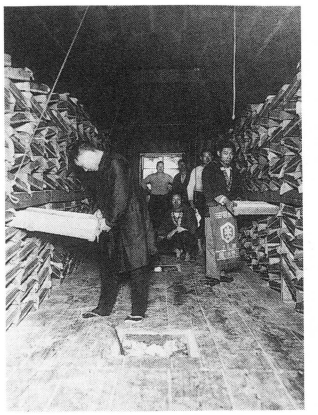
▲製麹作業の一部（味噌）



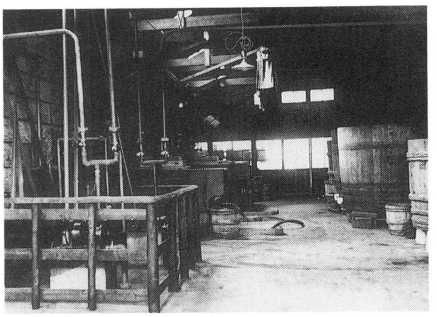
▲仕込み作業の一部（味噌）



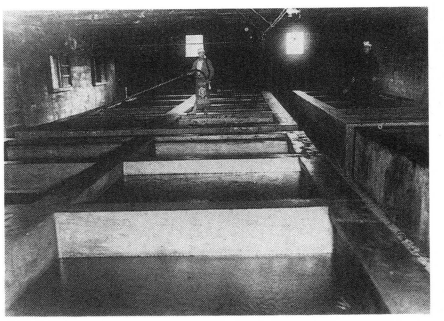
▲初荷出発前（市内）



▲製麹作業の一部（醤油）



▲搾醪設備と機械場

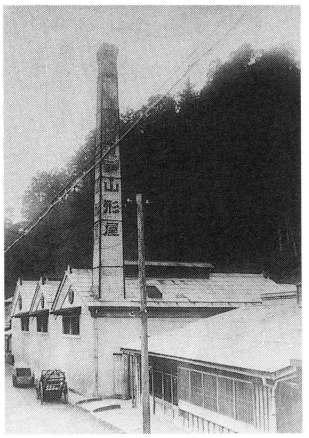


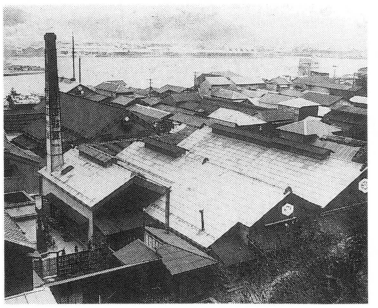
▲醪貯蔵タンクの一部

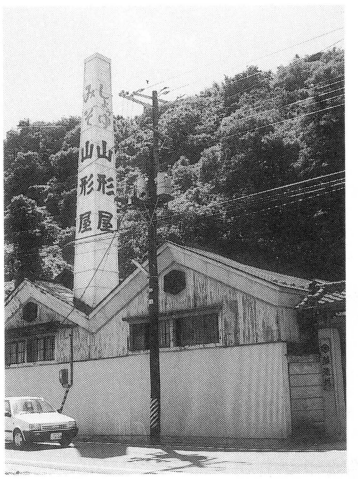
2	原材料の名称	原材料の手入方法・経路など	保存状況その他
素材（主たる素材）	味　噌		
	大　豆	戦前……石巻の米穀・雑穀問屋（日本産・満州大豆） 現在……宮城県味噌・醤油組合から購入（中国大豆・米国産）	
	米	戦前……石巻の米穀・雑穀問屋（日本産） 現在……宮城県味噌・醤油組合から購入（日本産・今年からタイ産）	
	塩	現在……宮城県塩業株式会社から購入	
	醤　油		
	大　豆	上記の味噌の場合と同じ。	
	小　麦	平成元年から半成品、生揚醤油を宮城県味噌・醤油組合から購入	

3	製作・加工の工程（細部の工程に留意）
製作・加工の工程・用具	〔米みそ醸造工程〕 精米 → 精選 → 浸積 → 蒸す 放冷 → 蒸米 蒸米 → 種こうじ 種こうじ → こうじ 食塩 → 塩切りこうじ 種水 → 塩切りこうじ 塩切りこうじ → 混合 → 発酵 → 熟成みそ → 製品 大豆 → 洗浄 → 浸積 → 蒸す → 蒸大豆 蒸大豆 → 塩切りこうじ 〔こいくちしょうゆの製造工程〕 小麦 → 炒麦 → 冷却 → 混合 → 製麹 → こうじ → 発酵 → 熟成諸味（もろみ） → 圧搾 → 生揚（きあげ） 種こうじ → 混合 塩水 → こうじ 脱脂加工大豆 → 加圧蒸煮 → 冷却 → 混合 圧搾 → しょうゆ粕 生揚 → 調整 → 火入れ → ろ過 → 製品 アルコール添加 → 火入れ • 昔は仕込みは手作業で１石に１人、８石に８人の人手がいる。現在は機械化（昭和37、38年頃）10石でも２人位でできる。 • 昔の仕込みは一年ぶりを新暦の11月に始まって１月２月３月と４ヶ月間で熟成させる（仕込む）。機械化（昭和37年以降）されてからは常にドヨウの温度でできるので１年に何回も仕込み年中やることができる。

昭和初年の製成場と従業員







▲平成５年　山形屋製成場

▲六代　山形又右衛門

醤油（二十）史歴の段値

九十銭	明治二十六年	五十六円十銭	昭和二十四年
二十銭	明治三十年	八十円八十四銭	昭和二十五年
三十二銭	明治三十八年	百四十円四十銭	昭和二十六年
四十四銭	大正七年	百五十二円十銭	昭和二十九年
六十九銭	大正八年	百四十円四十銭	昭和二十一年
八十四銭	大正九年	百五十四円八十銭	昭和二十三年
七十二銭	大正十一年	百六十二円九十銭	昭和二十六年
八十六銭	大正十二年	百七十一円九十銭	昭和二十七年
七十二銭	昭和二年	百八十九円	昭和三十九年
六十七銭	昭和三年	百九十二円十銭	昭和四十年
五十七銭	昭和五年	二百五円	昭和四十年
五十銭	昭和十年	二百八円十銭	昭和四十二年
六十二銭	昭和十三年	二百二十円	昭和四十三年
七十七銭	昭和十九年	二百九円六十銭	昭和四十四年
一円七銭	昭和二十年	二百二十九円七十銭	昭和四十五年
三十二円九十銭	昭和二十年	二百五十二円	昭和四十六年
五十二円六十銭	昭和二十一年	二百七十四円十五銭	昭和四十七年

の表は醤油（上の品質）1.8ℓ（昭和25年以降は２ℓ）当りの東京における年平均小売値段です。（明治26年から昭和40年までは東洋経済新報社刊「長期経済統計（8）物価」より、ただし昭和14年～20年は日銀統計局の東京小売物価指数より。昭和41年以降は東京商工会議所調べ、47年は総理府統計局調べ）

5．味噌・醤油醸造

調査期間	平成５年８月19日～平成６年２月26日	調査地	宮城県石巻市門脇町１－11－16	職種(技術)名　味噌・醤油醸造元
話　者	山　形　又右衛門（84歳）　男　明治44年５月１日生 下　村　隆　夫（73歳）　男　大正９年４月25日生			
技術伝承者(従事者)の呼称	**(通称)**　杜氏 **(家名・屋号)**　山形屋喜左衛門。キッコー山大　**(その他)**　山大			

1	地　域　的　特　色	技術の伝播（系譜関係を含む）・歴史的経緯
総観（調査地・職種〔技術〕等）	日本独自の液体調味料である醤油の醸造は、室町時代中ごろにはじまるとされている。味噌汁も応仁の乱（1467年）の時につくられたのが最初であり、室町時代には庶民のあいだにも常食として普及されるようになった。 江戸中期になると、原料確保にめぐまれ、大消費地への海上交通などの運搬手段の整った地方醤油醸造業が勃興し発展した。関東では野田・銚子がその例である。 多湿で暑からず寒からずと、本場の野田・銚子の風土に似ている石巻は、昔から味噌・醤油醸造の盛んな土地柄、北上川べりには米蔵とともに醤油蔵が立ち並び、それを運ぶ舟の往き来で活気に満ちていた。 大正15年醤油製造者は10人、昭和15年には８人、現在は７人である。 昭和37、38年（山形屋）新しい機械が入り１年に何度でも仕込みが出来るようになった（戦前は１年に１回の仕込みで熟成した）。そして石巻、女川、塩釜、気仙沼、釜石、青森方面の水産加工業者に販売を拡大し、また極洋捕鯨株式会社東部支社塩釜工場、日本水産女川工場に出荷し全盛を極めた。しかし南氷洋捕鯨禁止により現在の出荷は鴎洋水産株式会社気仙沼工場のみに出荷している。	山形屋は初代喜左衛門が文化年間に出羽国庄内加茂浦から門脇村に移住、煙草業を営んだ。四代喜左衛門は明治の初期から中期にかけて米穀、味噌、木材を商い、かたわら船宿も経営した。五代大輔にいたって明治41年、味噌、醤油を専業することになった。大輔は石巻と石巻周辺の町村に宅配することを立案、実施し、今日の山形屋の基礎を築いた。 杜氏、下村隆夫は雄勝町出身で杜氏千葉英五郎（岩手水沢出身）に師事した。師の死亡によって、昭和34年11月39歳の若さで杜氏になった。師事してから10年で杜氏になったことは異例の早さである。当時は岩手県水沢方面から杜氏をふくめて20人～15人若い職人が働いていた。現在は７人（石巻出身５人、岩手出身２人）で働いている。（機械化されたので）。昭和57年、協同組合30周年記念式典では県知事賞を受け県内最初の優秀技術者の栄誉を得た。

製作・加工の概要

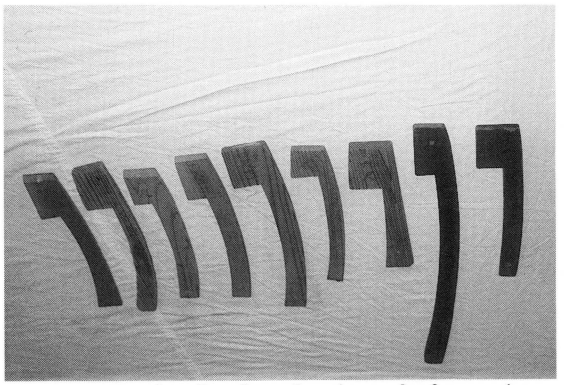
1）米みそ醸造工程

蒸米 → 塩切りこうじ → 混合 → 発酵 → 熟成みそ
蒸大豆 → 塩切りこうじ

2）こいくち醤油の工程

種こうじ → 混合
炒　麦 → 混合 → 製麹 → こうじ（塩水） → 発酵 → 熟成 → もろみ
大豆蒸 → 混合

もろみ → 圧搾 → 生揚（きあげ） → 調整 → 火入れ → ろ過



9　8　7　6　5　4　3　2　1

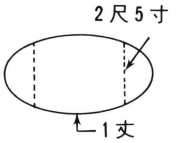
1……1丈2尺5寸
2……1丈
3……6尺
4……5尺
5……4尺7寸
6……4尺5寸
7……4尺
8……3尺5寸
9……3尺3寸

酒造用の6尺樽など
大きな樽、コガの径

23 22 21 20 19 18　17 16 15 14 13 12 11 10

10……3尺
11……2尺5寸
12……2尺2寸……センタク鉢
13……2尺7寸
14……2尺5寸
15……2尺4寸
ミソカゴ
16……2尺2寸
17……2尺1寸
18……2尺
19……1尺9寸
20……1尺8寸
21……6寸5分……湯オケ
22……4寸5分
23……4寸

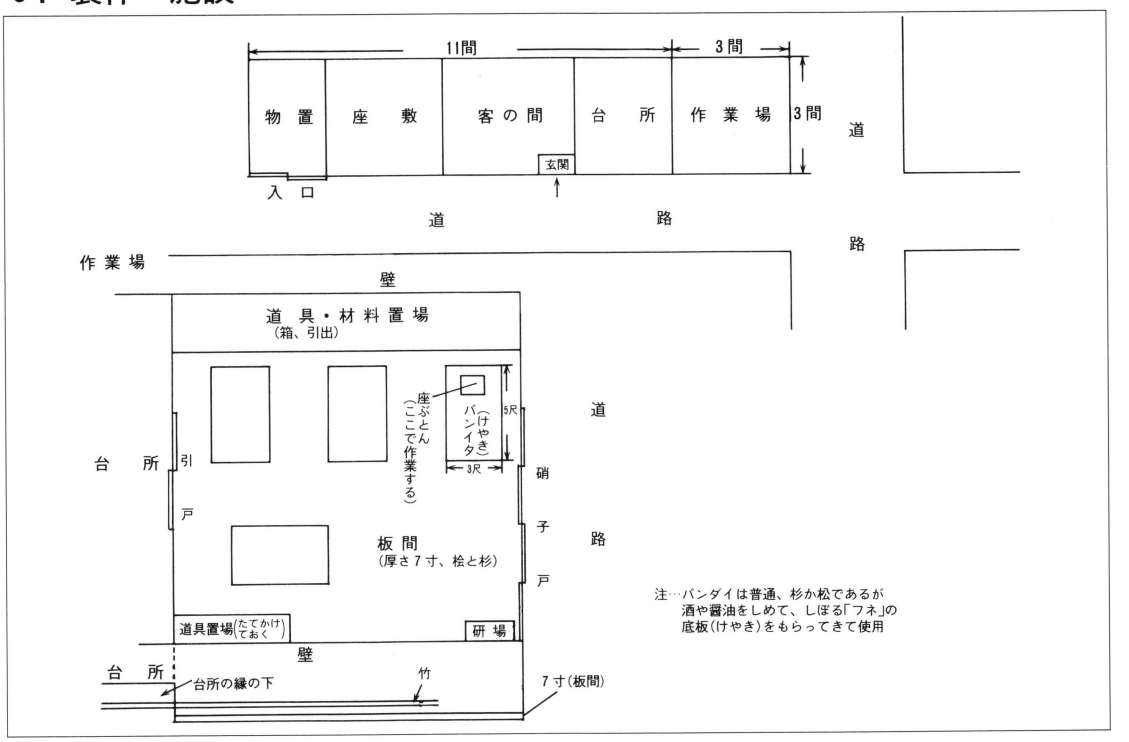
風呂桶の径

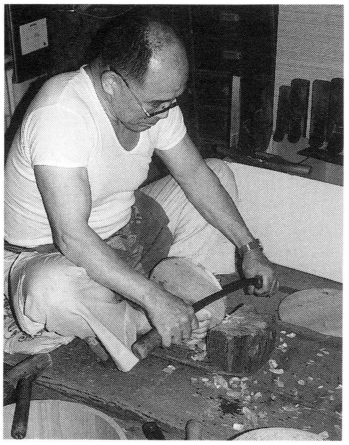


ミソカゴ

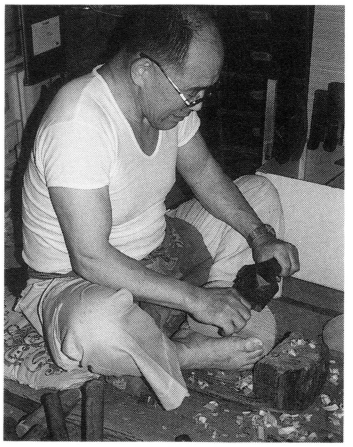
(注…8寸5分はツルベの径)

5．製作・施設



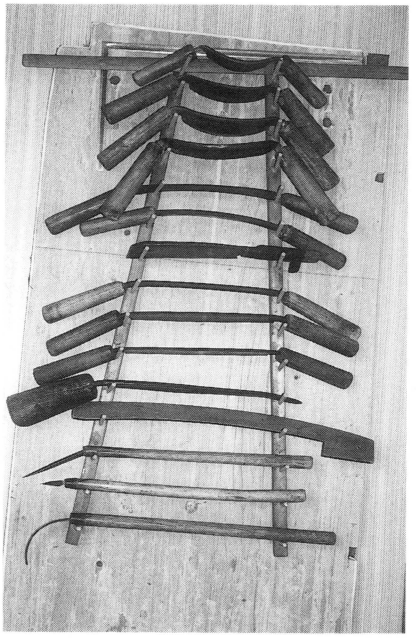


▲センで削る



▲マワシカンナで仕上げる

4．製作加工の用具



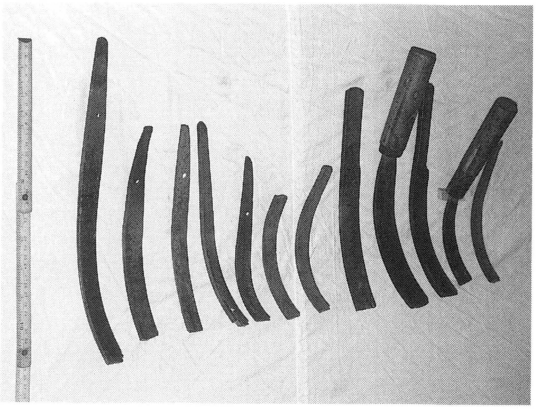
1
2
3
4　荒削り用の内のりを削る「内セン」

5
6　荒削り用の外のりを削る「外セン」

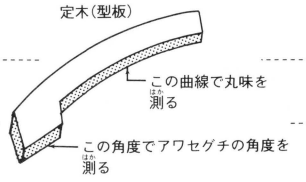
7……「ナタ」

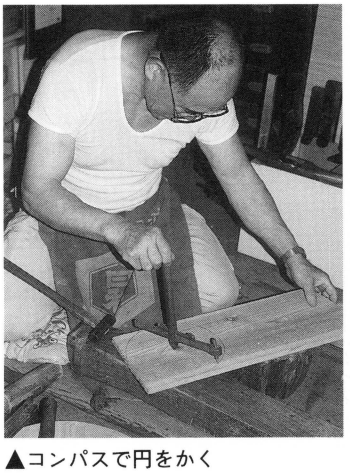
8
9
10　「外セン」

11……「竹セン」（竹の肉部を除き削るセン）
12……「定木」（「型」）
13……「ソトガンナ」（外側の凸凹を削る）
14……「アリカキ」（底板のフチを削る）
15……「イレギワ」（底を削る）

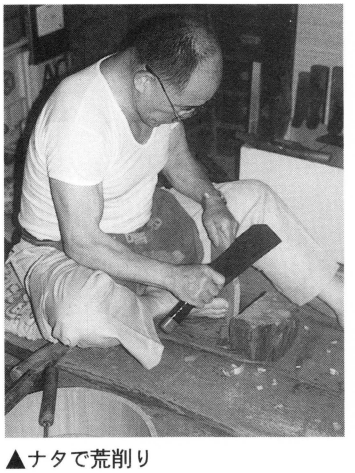


ワリガネ（丸太をノコギリで切ったものを割る道具、左側の柄のないものには日本刀でつくらせたものもある）

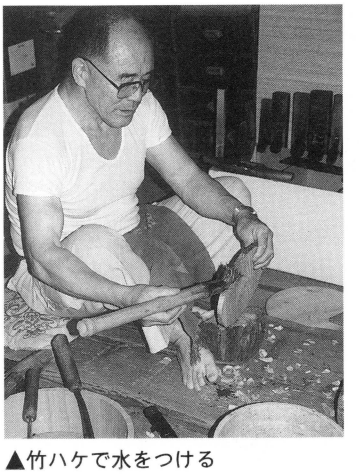
3	製作・加工の工程(細分の工程に留意)	具体的用具名	用具の使い方・変遷・個人的工夫など
製作・加工の工程・用具	1）酒樽 ①九太を切って（a）、割って（b）、荒削り（c）	a．大小のノコギリ b．ワリガネ c．内セン、外セン	
	②一ケ月屋根に重ねて乾燥してから脇を削る	カンナ、定木（型）、タル台、正直台、ハラ板、ウマ	
	③底板とフタを作る（a） タガでしめて仕上げる（b）	a．ソコマワス台、円形をとる定木（コンパス）、ナタ、竹ハケ（水をつける）、セン、マワシカンナ b．シメ木とサイ槌、イレギワ（底板のフチを削る）（写真参照）	• 昔は半径を板片に出し、中心をキリで止めて、円を描いて形をとる。 • 旧の２日…初売の日に間に合うように新正月に樽（酒樽、みそ樽）作りの作業で多忙である。初売の朝は酒屋に行って初売り配達を手伝う。
	2）みそコガ ①酒樽とちがう点は板目（イタメ）に割る（塩水を通さないように）	大体、酒樽と同じであるが道具が大きくなる。	
	②乾燥は風にあたるので下にほす。脇をとってアワセグチを竹クギでとめる		
	③酒樽と同じ		
	3）オハツ（小さな桶など） ①桶によって、高さがちがうから、高さに応じて丸太を切る。	ノコギリ	
	②割る	ワリガネ	
	③荒削り	内セン(内側を削る)外セン(外側を削る)	
	④定木(型)に合わせてカンナで削る	カンナ、定木（型板）	
	⑤タカクギ（竹クギ）でアワセグチを合わせてつなぐ		
	⑥アワセグチを糊（御飯をねったもの…今はボンドを用いる）をつける		
	⑦立てて底板に合せ、丸カンナで削る	内マル（カンナ）、外マル（カンナ）	
	⑧タガをかけて仕上げる。		



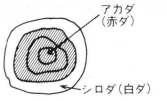
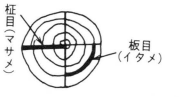
▲コンパスで円をかく

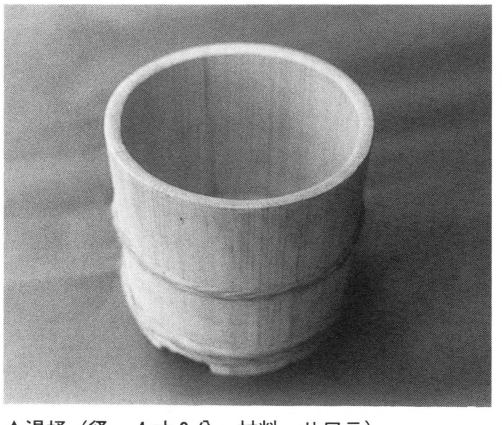


▲ナタで荒削り

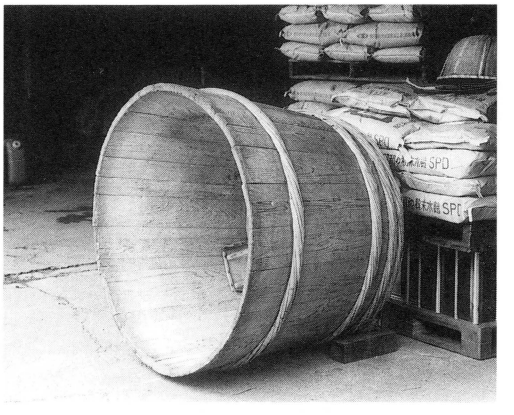


▲竹ハケで水をつける

2	原材料の名称	原材料の入手方法・経路など	保存状況その他
素材（主たる素材）	酒　樽……杉 味噌コガ……杉 風呂桶……杉か檜、今は青森シバ オハツ類……サワラ	• この地方のものを用いる。材料を吟味する時は秋田杉を用いる。 • 同　上 桶専門の材木屋か、普通の材木屋から割れるものをよって買ってくる。よく割れるか、割れてないかを見分けるには10年以上の修業がいる（フシはよける）。 • 同上、アカダの桶は上等である。風呂はふしがあってもよい。 • 寒い地方のがよい。特に上等なものは長野県のもので、ふしなしである。 （生木を買って割って乾燥させる。屋根いっぱいに井ゲタに組んで20日以上かわかす。）	• 樽とはフタのあるものを言う • ふしは風呂桶以外は用いない  吟味したものはアカダだけを用いる • 味噌コガなど塩水を使用するものは、板目（イタメ）を用いる。板目は塩水を通さない。水の使用する桶は柾目（マサメ）を使用する。 
素材（その他）	タガ材の竹……カラダケの生竹	• 竹の切る期間は秋の彼岸より春の彼岸まで、特に寒に切るのが一番よいとされている。3年後に再び切る。	



▲湯桶（径…4寸8分・材料…サワラ）



▲酒造用桶（径…3尺8寸・材料…杉）

▲酒造用桶（径…左より 4尺5寸、3尺7寸、2尺4寸・材料…杉）

諸職関係民俗文化財調査報告書(2)

石巻市文化財保護委員　鈴木　東行

4．桶　　屋

調査期間	平成5年 8月1日～ 8月10日	調査地	宮城県石巻市門脇町1丁目8の13	職種(技術)名　桶　屋
話　者	鈴　木　庄太郎（73歳）　男　大正9年3月12日生			
技術伝承者(従事者)の呼称	**(通称)**　タガヤ　**(家名・屋号)**　家名…鈴庄(すずしょう)桶屋・屋号…マルタ			

1	地　域　的　特　色	技術の伝播（系譜関係を含む）・歴史的経緯
総観（調査地・職種〔技術〕等）	天明8年（1788年）の『東遊雑記』には「石巻は奥州第一の津湊にして、南部・仙台の産物この地へ出て江戸に積み、大坂に廻る、ゆえに諸国より入船数多にして繁昌の港なり…」とある。 石巻は江戸時代以来、陸前北部の町方として、周辺、浜方、陸方の政治、経済、文化の中心として栄えて来た。したがって町方、浜方、陸方の人々に生活用品を供給するために各種の諸職も盛んであった。 戦前は生活用具として各種の桶の需要が多く、門脇町一丁目（約300軒、現在の100戸）だけでも、店を出したタガヤは3軒、職人も7～8人いた。大きな酒造業店には、タガ職人が住みこみで働いていた。 鈴木・武山・毛利・山形・木村屋などの味噌・醤油醸造業の店を一軒か二軒もてば食いぱぐれなく暮らすことができた。 また石巻港は明治から大正にかけて漁業近代化（漁船の動力化、漁具の工業製品化）の中心の漁港として栄え、水産加工業も盛んであった。したがって水産加工品を入れる桶屋も湊、渡波地区で栄えた。 終戦後、酒造業者は、ホーローを用い、昭和35年頃から化学製品の容器が出廻り桶類の需要は激減した。現在、店を出している桶屋は殆んど見られなくなった。	桶屋（タガヤ）の技術には、大別すると大物(おおもの)づくりの技術（酒造業用の6尺樽作りなど）と、小物づくりの技術（オハツなどをつくる）がある。鈴庄桶屋（マルタ）は小物づくりも大物づくりも両方できた。湊方面の加工業用の桶職人は小物づくりの技術は上手でない。 ・鈴庄桶屋の系譜 鈴木源兵衛（一代目）→庄之助（二代目、養子）→庄治郎（三代目）→庄太郎（四代目） 特に三代目の庄治郎の桶つくりは名人と言われるほど上手であった。また技術の内容は各家で少しづつちがっていた。 現在は庄太郎氏は桶屋はやっていない。

製作・加工の概要	オハツなどの小さな桶の場合 1．乾燥した丸太を切って、ワリガネで割る。 2．タテギの荒削（外セン、内センを用いる） 3．定木（型）で合わせながらカンナをかける。 4．タカくぎ（竹くぎ）でアワセグチを合わせつなぐ。 5．アワセグチに糊（御飯をねってつくる。今はボンド）をつける。 6．立てて底板を合わせる。 7．タガをかけて仕上げる。

石巻市文化財だより（第24号）

平成７年３月24日　印刷
平成７年３月27日　発行

発行：石巻市教育委員会
石巻市日和が丘一丁目１番１号
電話（0225）95－1111 内線345

印刷：株式会社　松弘堂
石巻市門脇字本草園２番16号
電話（0225）96－5555